



shiga 食育推進プロジェクト 活動報告新聞

shiga 食育推進プロジェクトとは？

県大地域食育推進隊「Shiga 食育推進プロジェクト」は、滋賀県立大学の生活栄養学科と生活デザイン学科の学生が中心となり、平成22年度に立ちあげたプロジェクトである。生活栄養学科は大学で学んだことを生かして食育の実施、各団体が実施する食育事業に参加・支援を行い、生活デザイン学科は食育事業においてトータルなデザインサポートを行うことで、魅力的な空間づくり、食育をより効果的に行うことのできるツール等を制作している。行政、地域の各種団体、大学が連携した食育推進活動を様々な方法で行い、学生が主体となった組織的なプロジェクトであり、地域食育推進のモデル大学となることを目指している。

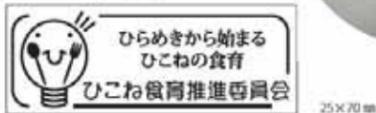
発効日：平成24年3月31日（金）

発行：県大地域食育推進隊

BIG NEWS



県大地域食育推進隊の学生が作成した、ひこね食育推進委員会の食育ポスターとゴム印が、来年度からひこね食育推進委員会で使用される。ゴム印に記されているマークは、生活デザイン学科の学生がオリジナルで制作したもの。「ひらめきから始まるひこねの食育」をキーワードにマークを考え、スプーンとフォークを持った電球がピカッと閃いている様子を表している。にっこり笑顔の口元は、ひらめきと彦根の「ひ」の文字が…。このポスターを見かけたときは、ぜひ、県大地域食育推進隊を思い出して欲しい。



nakaniwa cafe



滋賀県立大学生生活協同組合、栄養士会と連携して、昨年度に引き続き開催した。今年度は6月と11月に、栄養士さんによる食生活相談や体組成測定、県大地域食育推進隊による骨密度測定や牛乳&ケーキセットの販売が行われた。昨年度から継続して骨密度測定に参加する学生もたくさん見られ、食生活相談では、栄養士さんの話を真剣に聞いている学生が多かった。今年度は、骨密度測定時に測定結果の冊子を配布したことで、骨やカルシウムに対する知識をゆっくり学んでもらうことができた。

ひこね弁選手権

11月22日に開催された、ひこね弁選手権2次までの数か月間、県大地域食育推進隊は、優秀作品10点の栄養価計算や、調理補助、看板作製などを行い、彦根市を支援した。



連続食育教室



6月から10月にかけて、計6回の連続食育教室を開催した。調理を伴う食育教室を実施する中で、子どもたちが食に興味をもつようになった。彦根市教育委員会後援、第1~3回で他近江楽座団体のとよさらだとコラボ。



ひこね食育フェア

6月18日にひこねビバシティにて開催。県大地域食育推進隊は、ブースで骨密度測定&びわこ牛乳提供を行い、舞台上で食育クイズを2回行った。他近江楽座団体である未来看護塾とコラボし、骨密度測定後に未来看護塾が行う血圧測定等へと移動できるように、ブースの配置を行った。



ちょっと聞いてよ！ プロジェクト自慢

株式会社平和堂とこだわり滋賀ネットワークの協働企画。焼畑農業において収穫される山かぶらの収穫・調理の補助と食育クイズを行った。参加者は大人8名子ども9名の計17名。伝統的な農業方法に触れるとともに、参加者に対して食育教室を行うことで、参加者の食に対する関心を高めることができた。

山かぶら 収穫体験



地域の声

彦根市では、市民が生涯にわたって健やかで心豊かな生活を送ることができるよう、自らの食について考える機会や食に関するあらゆる知識と食を選択する力を身につけるために、様々な取り組みを実施しています。今年度も「ひこね食育フェア」、「ひこね元気フェスタ」での食育のお店、「食育講演会」と各種イベントを開催しており、その中で「県大地域食育推進隊」による活動は、参加者にとっては大変興味深いものばかりで、食育への啓発に大きく寄与するものでした。参加いただいた方からは、「測定してもらったことで、食事の見直しのきっかけになった」、「県大の『野菜を食べよう』の活動は他の行事でもやってほしい」、「環境こだわり農産物が低農薬に取り組まれていると知り、地域農産物にもっと親しみたいと思った」などのコメントをいただき、まさしく家庭での実践につながる食育の取り組みとなりました。

1年間の活動を通じた成果と課題

今年掲げてきた3つの目標のうち、1つ目の「縦、横のつながり」では、横のつながりとして、他近江楽座団体である、とよさらださんや未来看護塾さんとコラボすることができ、また、近江楽座以外の団体として、環境こだわり農産物PR団体とも合同企画が出来ました。縦のつながりでは、生活栄養学科と生活デザイン学科1~3回生の積極的参加がみられました。2つ目の「自主的な活動」では、昨年度は行うことができなかった活動内の食育クイズ提供などができ、また、nakaniwa cafe などの県大地域食育推進隊からの食育活動発信ができました。3つ目の「食育ツールの作成」では、食育教育の指導案、再利用可能な食育教育媒体を数多く作成することができた。来年度は、県大地域食育推進隊が行ってきた2年間の活動を、どのように継続していくかが課題となる。また、引き続きプロジェクト内で使用できる食育ツールの発案・制作を行っていく。

木興プロジェクト

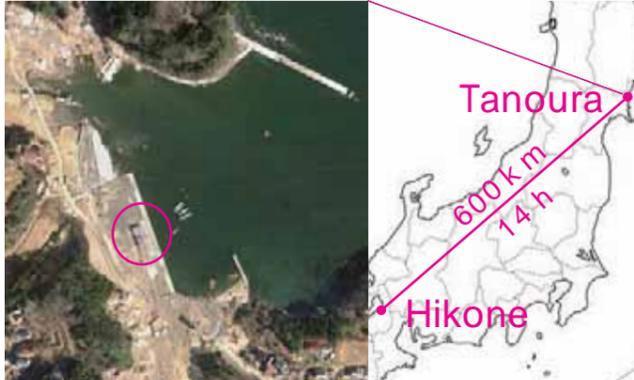
宮城県本吉郡南三陸町 歌津田の浦漁港に 番屋を建てる

木興プロジェクト つながり とは

東日本大震災という未曾有の事態を目前にし、滋賀県立大学建築デザイン、生活デザイン学生が立ち上げた震災復興プロジェクト。建築・デザインを学ぶ私たちに何ができるのか、何かできないかという思いが始まりである。例年木匠塾に参加してきたことから木造建築の設計・施工による復興支援を考えた。田の浦に巡り会い、小さいながら産業復興への一歩となる「番屋・漁師の方々が集う作業小屋」を建てる事になった。

田の浦とは

宮城県本吉郡南三陸町字田の浦。田の浦は南三陸町の北東に位置し、漁業を生業とし、震災前は特にホヤ、ホタテ、ワカメの養殖業が盛んであった。平成21年時点で、世帯数96戸、人口354人、船は100隻以上あった。10mを超える津波が押し寄せ、その中の55戸が被災。2011年7月の時点では35戸が仮設住宅での暮らしを強いられていた。滋賀県立大学と田の浦の距離90km。車で14時間の



木興プロジェクトは滋賀県立大学加子母木匠塾を母体とし、現地の宮城大学竹内研究室・番屋プロジェクト、NPO法人環人ネットワークの協力をいただき、資金面では近江楽座・環人ネットワークによる助成をして頂いた。それぞれの既存の関係が新たに繋がっていくことで成立した。田の浦へは6月11〜13日に第一回視察を行い番屋を制作する事が決定、7月1〜4日に現地で番屋案のプレゼンテーションを行った。

田の浦との出会い - 屋根の無い作業 場と漁師 -

田の浦を訪れたのは震災からちょうど3ヶ月が過ぎた6月初旬のころだった。田の浦の港は津波によって大きな被害を受けており、残されたのは小型の船が4隻と屋根のない作業場のみであった。

田の浦は震災当初、道路が遮断され陸の孤島となった。私たちが訪れた時も、支援車両が通り過ぎ、ボランティアもほとんど入っていない取り残された地区だった。

港には屋根のない作業場の下で次の養殖に向けて働く漁師の方々がいた。残された船に乗り合わせ海に出たり、わかめの種付け用の網を編まれていたのが印象的だった。

「ここは団結力があるし、やる気もある。けど、全て流されてしまった。できるなら人の集まれる場所がほしい。」田の浦の漁師さんの言葉である。この言葉がきっかけで、田の浦に番屋を建てることになった。

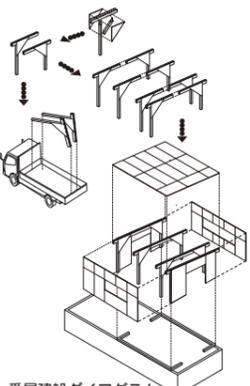
人の集まる場所と 海の見える窓を

1500mm高の基礎の上 強い海風に耐える 移築可能性 海が見える窓以上の設計要件で、番屋の設計を進めていった。最終的な設計コンセプトが以下である。

《人の集まる番屋》できるだけ多くの人が集まれるように、既存基礎の上の基礎を利用し、最大限床面積を確保した。そこには仕事場の海が見える窓がある。

《丈夫な番屋》田の浦は海風が非常に強い。何度か田の浦の方々に言われた。木質フレーム構造とし、外壁には構造用合板24mmを使用した。

《はこべる番屋》移築・解体に備え、柱梁を「I」型のパーツにし、解体の手間を少しでも省けるようになっている。「I」型フレームは2トトラックに載せることができる。



番屋建設ダイアグラム

夏期制作活動

番屋を建てるため夏8月6〜18日の13日間、田の浦を訪問し活動させて頂いた。今回のプロジェクトは木匠塾が母体となっている。例年制作物を手刻みで作ってきた。プレカットではなく、材選別に始まり、野書き、墨付け、部材切り出し、仕口加工、基礎打ち、組み立てまで全ての作業を参加メンバーが行った。設計・施工を共に行う事で、建築をつくるという事を頭と体で学ぶことができる。同時に、工費の削減もできた。

田の浦で暮らす・見る聴く 話す触れる酒を飲む笑う・

つい数ヶ月前までは「田の浦」という名前も知らなかった。田の浦の方は、そんな私達を温かく迎えてくださった。高台の作業小屋をお借りし、雑魚獲した。ハエが大量発生しており、何度追い払っても食べ物や体に ついてきた。漁師さんや近所のおばあちゃんがほぼ毎日、新鮮な魚や野菜の差し入れをしてくれた。朝の漁に連れて行って頂き、魚の捌き方も教わった。本当に被災地か？と錯覚してしまうほど現地の方が優しく力強い。最初は、なまり言葉を理解するのも難しかったが、だんだんと慣れた。作業中は毎日漁師さんからアイスの差し入れを頂いた。作業の手を休め漁師さんと話を花を咲かせた。飲み会の最中、漁師さんが、うれしそうに「こうやってみんなで集まって飲むのは震災あつてからはじめてだわ」とつぶやいた。現地に行き、現地の人と暮らし、他愛のないことをする事がどれほど大切かと気付かされた。



ほたてあかり 使われる番屋

「漁業復興まで女性の仕事がない。その間何か皆で集まる場と仕事をつくれないうか。」こうして始まったのが「ほたてあかり」である。田の浦のほたて貝と滋賀のお寺で出る残燐を使い、田の浦の女性を手作りするキャンドルで、売上げの半分を女性達に、もう半分を復興資金へあてている。木興プロジェクトは、こうした継続的活動のきっかけとなった。ハード(番屋)とソフト(交流、ふれあい)が同時に準備できていたことは、非常に重要であったと感じる。

番屋は漁師の手によってほとんど手が加えられている。最高気温が零度ほどになる12月には、漁師さん達はストーブを囲み談笑していた。「助かってんの。これがなごうたら皆が集まって話すことがないから。」

漁師の腹、 漁師の背中

繰り返し聞いたのが田の浦にはかの場所から人が来てくれるのが嬉しいという言葉だった。実の話をすると私たちが訪れた当初は、「本当にもう一度来てくれるのか」という疑心暗鬼の気持ちでいたと言った。「五年後、十年後また来てくれ、そのときはもっと良いものを食わせてやる。」作業の傍ら毎日岸にあげられる瓦礫、送り盆に供えられる果物。「これがおれたちの仕事だ」と諭す漁師の背中は震災の爪痕の深さを教えてくれた。土地があり、人がいて、必要とされるものがあつて、それをつくらせてもらう私たちがいる。この手を動かしてつくることの意味の深さを知る。「建築」は人と土地を強く結びつける力を持つ。多くを失った場所から多くを学んだ。



小学校出前授業 計3校に!

菜の花エネルギー



小学校出前授業とは?

小学校出前授業は、劇やスライドショーを用いて地球温暖化やカーボンニュートラル、バイオディーゼル燃料について説明し、子供たちに環境問題やエネルギー問題について考えてもらうことを目的としている。今年度で3年目となるこの活動は、新たに彦根市立稲枝東小学校を加え、実施学校数が計3校となった。



→稲枝東小学校の出前授業のエネルギークイズの様子。生徒が積極的に授業に参加している。写真は2011年11月17日撮影。

今年度は、6月に彦根市立城北小学校を2クラス、10月に城西小学校を2クラス、11月に稲枝東小学校を3クラス、出前授業を行った。稲枝東小学校への訪問ではケーブル放送ZTVから取材を受け、菜の花エネルギーの活動を宣伝していただいた。

授業中には、「ひこにゃん」などのキャラクターが登場させ、子供たちにも分かりやすいよう工夫を凝らした。また、温度差で発電するペルチェ素子を用いてプロペラを回す実験も行った。

地域

の声

小学校出前授業でのアンケートより抜粋
・バイオディーゼルのことをもっと詳しく知りたくなりました。
・劇をしてくれたので、すごく分かりました。
・前から「地球温暖化」は知っていたけど、どういふものなのかは知りませんでした。でも、今回の授業でよく分かりました。
・氷で手が冷えたけど、プロペラを回せてうれしいです。

「菜の花エネルギー」とは?

菜種油を原料としたバイオディーゼル燃料を用いて、「資源循環型社会」の形成を目的に活動する団体。今年度で活動5年目を迎えた。菜の花栽培や小学校への出前授業など、環境やエネルギーに関わる活動に取り組んでいる。

湖風祭も大盛況!

今年度も昨年に引き続き、湖風祭に出店した。今年は昨年行った自転車発電と手のひら発電に加え、栽培した菜種から搾った菜種油を使った天ぷらの試食も行った。自転車発電は小さな子にも体験してもらいやすいように大小2台の自転車を用意したことで、より多くの方にエネルギーを作る大変さを実感してもらえた。また、天ぷらの評判も上々で、多くの方々と触れ合える貴重な体験となった。



→揚げた天ぷらと手のひら発電の様子。写真は2011年11月13日撮影。



ちよつと聞いてよ!
プロジェクト自慢

学内に菜の花畑登場!

今年度の新規活動として、学内空き地の菜の花畑化が挙げられる。この活動は、滋賀県立大学の学生および教職員の方々に、我が団体の活動をPRする為に発足した。初の試みであったので、土の状態の為か、畑の全体的に発芽はしなかったが、上記の写真のように一部は芽を出すことに成功した。これからの課題として、土壌の良質化や畑の宣伝が考えられるが、まずは一度皆さんに拝見していただきたい。畑の場所は、工学部棟のC1棟とC2棟の間の空き地となっている。



↑菜の花畑化に成功した空き地の様子。写真は2012年3月19日撮影。

バイオディーゼルカート 今年も好評!

2012年3月4日開催のびわ湖毎日マラソン内環境キャンペーンふれあいテント村でブースを出展した。昼からは生憎の雨天となったが、多くの地域から当ブースへと足を運んでいただき、より多くの方々に我が団体の活動を知っていただけた貴重な体験となった。この活動は今年で2年目。手のひら発電の実験体験や、バイオディーゼルカートの展示、我が団体の活動紹介のパネル展示などを行った。



↑小さな男の子がバイオディーゼルカートに座っている様子。このバイオディーゼルカートは男の子・女の子問わず、大人気でした。写真は2012年3月4日撮影。

成果と課題

今年度は、小学校の出前授業先が3校に増えたり、採れた菜種油の食用化にも成功し、農家の方々とつながりも開くこともできた。これにより、より多くの地域の方々に私たちの活動を知っていただき、「資源循環型社会の形成」に貢献できたのではないかと考える。

一方で、高大連携授業でのバイオディーゼルカートの運転失敗というミスも発生した。この件に関しては、事前準備をしっかりと行うことにより対応していきたいと思う。また、小学校出前授業などで行う実験の種類も増やせると、より活動の幅が広がると考えられ、今後目標にしていきたい。

toyosato kaizo project

とよさと快蔵プロジェクトとは？

とよさと快蔵プロジェクトは、2004年に発足し、それ以来昔ながらの風情ある街並みを持つ豊郷町の空き家となっている9件の古民家や蔵を改修・活用してきました。また、改修活動のみならず豊郷町内のお祭りに参加したり、イベントを企画したり、同じフィールドで活動するプロジェクト同士で交流を図ったり…。

私達学生が豊郷町にできる「まちづくり」とは何なのかを考え、活動しています。

① 掃除は改修の第一歩！



快蔵にとって記念すべき10件目の改修物件となる前田邸。今年度最初の作業はこの物件の庭にあふれるゴミの山の掃除から始まりまりました。掃除は古民家改修の第一歩！とは言ったものの、夏の強い日差しの中でひたすらゴミを運ぶ作業はなかなか厳しい。何度も挫けそうになりましたがメンバーで励ましあいながら何とか乗り切ることが出来ました。下準備が終わり、これから徐々に改修を進めていきます。

② WSに向けての補強整備

折れた梁を補強し、落ちた屋根を張替え。今年度の活動の軸となるWSに備え、物件の危険部位を直していきました。大掛かりな作業となるため、講師として建築学科の非常勤講師の中西先生や豊郷の板金屋さんを招き、指導してもらいながらの作業となった。今回の作業を通して、メンバーは知識的にも経験的にも一回り成長しました。



③ 他の改修団体への視察

今後、前田邸を改修・運営していくにあたってどのような方法があるか。先進事例の視察としNPO法人町並み屋並み研究所のもとを訪れました。一般の方を巻き込む広報力、プロが関わる本格的な改修。学ぶことがたくさんありました。



④ 古民家でのWS

町の方々と古民家を通してつながりたい。そんな気持ちから企画された各WS。実際に会場を訪れていただいた方々にはとても喜んで頂きました。普段古民家の空間を体験することのない方々には逆に新しい感覚を味わっていただけたのではないのでしょうか。



⑤ 改修は着々と進行中

とよさと快蔵プロジェクト10件目の改修物件、前田邸。ゆっくりではありますが着々と改修作業は進んでいます。作業に当たるメンバー達も前田邸が徐々に形になっていくに連れ、完成の期待が高まります。今年度実施した数々のWSの舞台となり、つながりを生んだこの前田邸が、完成後も人と人とのつながりを作る場所として町の方々に活用されてくれることを期待しながら来年度も改修を進めていこうと思います。年度始めと比べて見違えるほどスッキリとした庭を見て、更に改修に対する意欲が湧いてきました。



2011年度の成果と反省。

今年度は『古民家を通してつながりをデザインする』というスローガンのもと、活動が開始。前年度からの課題、豊郷を知り、人に関わり、町の住人とい学生とで豊郷について考えられるように、改修WS・古民家体験WS・資産発掘まちあるきWSなど企画・運営に力を入れました。

参加者に対する広報、WSの受け入れ体制に課題が残りましたが、参加者の皆さまからは好評を得ることが出来ました。

出来たつながりを絶やさず、さらに大きくしていくことが今後の目標です。

2012年3月31日

とよさらだ新聞

BIG NEWS!

県大ファーム 始動☆

本年度は滋賀県立大学キヤンパスの近くに県大協同ファームという畑ができました。最初は草を刈って土を入れるところから始めて、今はその一画でとよさらだも野菜の栽培をしています。県大ファームでは野菜を栽培するだけではなく、同じ近江楽座の団体であるShiga食育推進プロジェクトさんとバンデイヤ・ジオウロさんとコラボレーションすることができました。Shiga食育推進プロジェクトさんとのコラボレーション企画では、子供たちと県大ファームで実ったミニトマトを収穫し、そのミニトマトを使って冷静パスタを作ってもらいました。バンデイヤ・ジオウロさんとのコラボレーションでは、一姓さんも加わって、ブラジル人保育園の子供たちといっしょに県大ファームに白菜の苗を植えました。どちらの企画も子供たちと畑を通して交流するという新鮮で楽しい時間を過ごすことができました。また、他団体さんと交流することでの団体の活動をより知ることができ、自分たちの活動を改めて見直す良い機会となりました。機会があればShiga食育推進プロジェクトさんとバンデイヤ・ジオウロさんとはもちろん、ぜひ色々な団体さんと協力していきたいなと思いました。



↑ブラジル人保育園の子どもたち



↑すっかりなかよしくなっているメンバー

とよさらだって?

私たちはとよさらだは、滋賀県豊郷町にある耕作放棄されていた畑を再生し、地域の方々の協力の下、農業や化学肥料に頼らない野菜作りをしています。栽培した野菜は大学の生協食堂に出させてもらったり、朝市や直売所へ納品したりしています。また、豊郷町で行われるイベントに参加し、お手伝いをすることもあり、私たちの活動を通して、農業の高齢化、耕作放棄、農業、化学肥料、農業の流通、環境への負荷、学生のまちへのかわり方、ごみ、安全な食べ物、地産地消、公共事業、高齢者の福祉などさまざまな問題に対して、何か主張できるのではないかと考えています。「たかが学生。けれど、なににも縛られていない学生だからこそできることがしたい。着実に成長しながら進んでいきたい。」そんな思いから、2009年、とよさらだは動き出しました。

☆1年間の成果と課題☆
 昨年からは彦根市の農産物直売所に、自分たちが作った野菜の委託販売をするようになったことで、野菜の販売価格の現状や、今ほど野菜が人気なのかなどを他の農家の方や地元住民

の方との会話の中で学ぶことができて、販売すること意識した野菜作りができるようになった。本年度は参加人数が倍に増え、インターン生の参加もあり昨年より人手不足も解消されたかのようには思えましたが、平日や夏休みなどは参加メンバーが固定されてしまったため、この参加メンバーの偏りを解消することが一つの課題になると思っています。



→ビニールハウスで元気いっぱい育てるベビーリーフ

☆カボチャのジャム☆

昨年6月、豊郷町にいきがい協働センターという加工センターができました。とよさらだは、竣工式を始めた色々なイベントごとに加工センターで手伝いをさせていただきました。8月から11月にかけては、豊郷町の名産品である坊ちゃんカボチャを使ったジャムの試作・調理に携わりました！日頃からお菓子作りに取り組んでおられる方と一緒にカボチャの自然な味をいかしたジャムを目指して色々な調理法を試行錯誤したり、ジャムの瓶を飾るラベルの案を考えたりしました。



↑坊ちゃんカボチャのジャム

そうして出来上がったカボチャのジャムは、食感がなめらかであることに似ているというところで、「あん×ジャム」という名前で豊郷小学校や大津百貨店などで期間限定販売されました。

★地域の方からのコメント

とよさらだの皆さんは豊郷町の疲弊している農業に爽やかな微風が吹くように楽しく、パイプハウスでの農作業も熱心に取り組んでいます。地元農家の皆さんも感心しておられます。昨年度に引き続き、町主催のイベント「とっとと夏祭り」にも積極的に参加していただきました。さらに本年度は、農家からの田んぼ一反の水稲栽培や本町の特産物である「坊ちゃんカボチャ」を使った「手作りジャム」の開発など、本町の活性化に力を入れて

ちょっと聞いてよ！ プロジェクト自慢

☆お米作りに挑戦☆

とよさらだが主に栽培しているのは野菜ですが、23年度はお米作りにもチャレンジしました！古川さんの田んぼでのお米作りを、種おとし作業から草刈り、田植え、稲刈りなどの作業をお手伝いしました。一反の範囲でしましたが定期的な草刈がとて大変で、斜面に生えた雑草を草刈り機で刈る作業はとて苦勞しました。田植えと稲刈りは手作業だけでなく、古川さんの指導の下、コンバインの操縦にも挑戦しました！収穫したお米はおにぎりとして販売したり、秋の湖風祭で用いたりしました。お米作りは何かと初めての体験で、夏場の作業や悪天候の影響など決して楽なものはありませんでした。しかし、少しずつ成長していく過程や実りの姿を見るととても嬉しく、やってよかったなと思いました。



↑コンバインの操作の指導を受けるメンバー

バンデイラ・ジ・オウロ



←クリスマスパーティー
(12月・ペケーノの
子どもたちと)



↑かるたづくり(1月企画授業)

企画授業大成功！

昨年度に引き続き、サンタナ学園で月に一度の企画授業を行いました。今年度は、日本の季節の行事に関連した授業を企画し、日本の文化を体験してもらうことが多かったです。6月下旬には七夕の飾り付けを行い、願い事を日本語で短冊に書いてもらいました。1月にはかるたを作り、その後みんなでかるた取りをして遊びました。こうして少しずつ日本語や日本文化に触れる手助けができたのではないかと考えています。

こちらが企画するばかりでなく、9月は他の近江楽座とのコラボで、「あかりんちゅ」さんと呼び、キャンドル作りを行いました。10月には向こうで行われるハロウィンパーティーにお邪魔しました。バンデイラのメンバーも少し仮装しましたが、向こうの子どもたちはみんな本格的です。このように、日本の文化を一方的に伝えるだけでなく、私たちがブラジルの文化を知ることでもでき、お互いに理解し合う機会にもなっています。

バンデイラ・ジ・オウロとは・・・

ポルトガル語で「金の旗」という意味。ブラジル人保育園兼学童保育所【ペケーノ・ポレガール・彦根市】やブラジル人学校【サンタナ学園・愛荘町】で、公立小学校に通う子どもの宿題をみたり、図工やお菓子作りなど子どもたちが楽しみながら日本語に触れられる授業を企画しています。また外部講師を招いて、日本語指導の教授法やポルトガル語について学んだり、各地の先進的な活動を行っている団体を視察するなど、よりよい支援活動を行うために様々な取り組みをしています。

→ハロウィン
パーティー
(10月企画授業)



←ペケーノでの
宿題指導の後に

成果と課題

メンバーが増え、継続的にペケーノで学習支援を行うことができるようになり、サンタナ学園での企画授業も引き続き行い子どもたちに日本語や文化に触れる機会を提供することができました。また、学習会を開いたり、セミナーに参加したことは、活動を見直す機会になりました。特に、愛知教育大学の視察し、活動している学生と意見交換会を持てたことはプラスになり、どうすることが子どもたちのためになるのかを考えることができました。一方で、計画に合わせて早めの行動ができなかったため、荒神山でのキャンプやポルトガル語の学習会など企画倒れにしてしまった計画もありました。

来年度からは新しい活動の柱として、近江八幡で外国人児童の学習支援を行っている「ワールド・アミーゴクラブ」と協働して支援活動を行いたいと考えています。

地域の人々の声

この活動は、サンタナ学園やペケーノで継続的に支援や交流をして、外国人の子どもへの理解を深めています。とても価値のある活動であり、子どもたちにとっても生涯忘れることのできない出会いや体験になっていると思います。お兄さんやお姉さんが外国の子ども達の喜ぶ顔を想像しながら活動を企画し、準備し、近くない距離を移動して、ともに楽しい時間を過ごします。そのすべてのエネルギーが子どもたちに注がれていると思います。

この活動が継続され広がっていくことを、祈るような気持ちでいつも見えています。

(外国人児童への教育支援に携わっておられる 平田輝子さん より)

私たちの自慢

ペケーノでは子どもたちの誕生日や季節のイベントの時、よくパーティーが行われます。そこで普段食べる機会のないブラジル料理を食べることがあります。「フェスタ・ジュニーナ」という6月に行われるブラジルのお祭りや、クリスマスパーティーの時には、子どもたちの保護者の方が食べきれない量の料理やデザートを持って来られ、お腹いっぱいになるほどいただきました。ブラジルのデザートにはココナッツを使っていることが多い気がします。初めて食べる料理ばかりですが、一度食べると病みつきになってしまいます。



男鬼楽座新聞

「新時代へ」



参加させて頂きありがとうございました。皆さん温かく迎えて下さり、居心地が良くて・・・感動です！

本当に素敵な仲間ですね。これからの活躍を楽しみにしています。台風、大丈夫だったかな？後片付け大変かと思いますが、よろしくお祈りします。来年のイベントでも会えることを楽しみに待っています。

(イベント参加者：星野百合子)

成果

五月、雪の重さで足場の位置を組み替えると同時に現在の集落の状況を確認しました。七月と九月葺き替えイベントに来て下さった総勢一三七名の方々に、茅葺き屋根がどのようにして出来上っていくかを存分に体験して頂きました。一月には茅刈りイベントを行ないました。天候に少々不安を覚えました。怪我なく無事に茅を刈ることができ、約一五〇束の茅が出来上りました。来年度に使用します。



一般の参加者と一緒になって修復を行ないました。今後も多くの方々に来て頂くことがプロジェクト続行の課題だといえるであろう。

課題

私たちの持つ課題は、活動のメインが屋根の葺き替えイベントとなってしまう点です。本来の目的である男鬼集落全体の保存・活用には未だ至っていないことです。元住民の方や地域の方型と交流を深め、男鬼の今後を共に考えていく必要があります。しかし、元住民の方の高齢化が進んでおり、交流の場を開けないのが現状です。今後は出来る限りの方法で連絡を取っていききたいと考えています。

男鬼(おおり)楽座は、滋賀県彦根市男鬼町を中心とした山間集落の可能性を探り、文化的景観資源の保存と活用を考えることを目的とする団体です。毎年七月に男鬼町の大久保正一郎にて、茅葺き屋根の葺き替えイベントを行なっています。昨年は七月一七、一八と九月一七、一八日の計四日間開催しました。イベントには、学生を始め一般の方々にもご参加頂き、茅葺き職人さんのご指導を受けながら作業を進めました。活動は二〇〇四年から始まりました。男鬼町の基礎調査を行ない、民家単体でも集落としても地域文化財としての価値があることに気づき、情報発信に努めました。景観維持のための直接的な活動として、茅葺き屋根の補修・葺き替えを開始したのは、二〇〇七年の事です。



↑ 2009年の葺き替え状況(写真上)と
2011年の葺き替え状況(写真下)

「――普通の人生では味わえない――」

現代社会では茅葺き屋根の民家は廃れてしまっていて、なおかつ自らの手で屋根を作り上げることなどほぼ無いでしょう。しかし、男鬼楽座が毎年開催する葺き替えイベントに参加することで、それを体験することができま

す。一生に一度あるかないかの貴重な体験なので、少しでも気になった方はぜひ参加してはいかがでしょうか？一からものを作り上げることの感動を味わえること間違いなしです。



地域のお年寄りと学生をつなげお年寄りに元気になってもらいたい！
 州区の人々だけでなく外部の人々が交流できる場を提供したい！
 地域の子供たちに農業の楽しさ・素晴らしさを伝えたい！
 畑に作物だけでなく人との出会いの花を咲かせたい！



一姓とは？

野菜作りに興味があったけど場所がなくて作れなかった、土いじりが好き！、自分で作った野菜を食べたい！、様々な人と交流したい！、そんな学生が集まった団体である。学生がプチ農業体験を行い、農業の大変さを実体験することで、野菜の大切さ、食の重要性、農業の必要性を学んでいる。

一姓は、開出今集落の「一姓畑」に拠点を置いて活動している。学性が地域に入って畑作りをすることで、周囲の地域の方々に元気になってもらい、一緒にやって野菜作りをすることで学生のパワーアップを目指している。また、一姓畑の周囲で、畑作りをされているお年寄り、集落の若い世代を畑でつなげる仲介役となり、地域を活性化する仲介役となることを将来像とする。そして、一姓に興味のある他大

県大ファーム

交流プロジェクト

今年度一姓は新たな地を開拓した。それが県大ファームである。県大ファームとは増田教授の発案で、滋賀県立大学の琵琶湖側に少し歩いたところに位置する空き地にトラック10杯分の土を導入し、耕して野菜を作れるようにした場所である。県大ファームはとよさらだと共同で開拓した。県大ファームを新たに開拓した目的は、そこを交流の場にしようとする事だった。

私たち一姓はそこにたくさん作物を植えた。例えば、ローズマリー・レモンバーム・ミント・ローズヒップ・タイムなどのハーブを植えた。それらは自分たちでも利用したが、できが良かったのでイベントに使用することにした。1月9日に「おとくら」さんのさそいもあり、喫茶おとくらでハーブティーをださせてもらうことになった。寒い中訪れてくださったお客さんは10人ほどだったが、おとくらさんのお菓子と一姓のハーブティーをいっしょに飲んで、喜んでもらえて非常にうれし思いをした。

県大ファームにはさつまいもの苗も植えた。さつまいも掘りイベントは一姓では毎年恒例になっている。今年度の10月23日には「Homeboy」さんと共同で県大ファームにて、子供たちとそのお母さんたちとでさつまいも掘りをした。畑に入った子供たちはうれしさにさつまいもの上に立ち、大きな芋を掘り当てると大喜びをしていた。そしてその後採りたいもをつかって焼き芋をした。これが思ったよりも



難しく焼けるまでなんと一時間以上も掛った。でも採れた野菜をその場で味わって、本当によかったです。

プロジェクト自慢！

野菜作りを通して…

- *地域の住民との関わり
小さな範囲の中での交流ではあるが、近所の住民と密に関わることができる。
- *食の重要性
猛暑による夏の不作、大寒波による冬の不作によって野菜を作ることの大変さ・難しさ、食の有難さを実感できる。
- *チーム力の大切さ
一人ではなかなか進まない作業でも、仲間がいることで作業の進み方が変わり、チーム活動の意味も学ぶことが出来る。

後期の活動

後期の活動としては外部にできることが多かった。3月4日にはびわ湖毎日マラソンで豚汁を出店した。ここでは自分たちが作った野菜と滋賀県産の野菜を使い、地産地消をアピールするのが目的だった。だがアピールの方法が口で言うのと看板を出すだけで、地産地消の意味、良いところをあまり伝えられなかった。来年からはチラシを配るなどしてより多くの人に知ってもらうようにする。ともあれ、びわ湖毎日マラソンの日はとても寒く、温かい豚汁を買ってくれた人からは感謝の言葉をいただき、出店したかいたが良かった。今後、外部にできることは自分たちのやっていることをアピールしていくのが目標です。

地元の声

BBOやさつまいも掘りなど、地域住民との交流は非常に良いことだと思います。私は学生と畑作業をすることがよい気晴らしになりますし、お年寄りや学生が交流することでお互いに得られるものもあります。頻りに畑をのぞきに來るだけでも近隣の住民と会話が生まれるし、学生が一生懸命作業をしている姿を見ると周りも元気づけられます。大学生活は忙しいと思いますが、これからも頑張ってください。

一年間のまとめ

成果

今年度は外部の人々と交流できる場を設けることを目指した。とよさらださんとの県大共同ファームの企画をスタートさせ、Homeboyさんと未来看護塾さん、おとくらさんとの合同イベントを実現させることができ、より多くの人々と交流することができた。また、前年度に引き続き土壌の改良を行った。その結果前年度よりも野菜の生育に向上が見られ、学生への野菜販売を行うことができた。それによって学生へ向けた一姓のアピール、また農業への興味を持つきっかけを作ることができたと思う。びわ湖毎日マラソンへの出店は今年で3度目となり、豚汁を購入して下さるお客さんの中には前年度の出店を覚えていた方もいらっしやり、出店の効果を実感できた。

課題

開出今の子供たちとの交流の場であるさつまいも掘りイベントは今年度も開催することができたが、前年度課題として残った「植える」・「食べる」農業体験を実現できなかった。理由は「植える」だけのイベントでは子供たちに興味を持ってもらえず、参加者が集まらなかったからである。保護者からは「植える」だけのイベントではなく「植える」+「収穫する」が同時に行うことができるイベントを企画してほしい、といった声をもらった。この経験から畑の野菜を計画的に栽培し、他の野菜を収穫してさつまいもを植える農業体験が同時にできるようなイベントを企画し、子供たちに興味をもってもらえるように改善した方がよいと思った。またブログで畑の近況を報告することになっていたが、徐々にブログも更新されなくなってしまう。どうやって上手く当番を回し、チーム内で成果の情報交換を行うかがこれからの課題である。



BIG NEWS

コンサート・ライブが
充実した一年に

「4回のライブ・コンサートを開催」

おとくらは今年も喫茶の営業をしながらイベントの企画、開催をしてきました。中でも私たちおとくらが力を入れているのが音楽イベントです。今年も1年間で4回のコンサート、ライブを開催しました。

まずは7月に「おとくらいぶ」を開催しました。これは彦根で活動しているアマチュアバンド HATA.LAB さんを中心に地元彦根で活動しているアマチュアバンドによるライブでした。県立大学、滋賀大学の学生も参加し、たいへん賑やかなものになりました。

9月にはオープン2周年を記念したライブを開催しました。「tokyo blue weeps」さんに出演していただきみんなでおとくらの記念日をお祝いしました。

続けて10月にはジャズコンサートを開催しました。これはインターネットでおとくらを知った「クニ三上」さんからのリクエストで、おとくらでコンサートをしたいと連絡をいただき、実現したものです。クニ三上さんはジャズの本場ニューヨークで活躍している方で、その日はいつもと違った雰囲気のおとくらを楽しむことができました。

そして3月24日にはコンサート「春の誘い」を開催しました。出演の白谷仁子さんはおとくらコンサート常連で毎回素敵な歌声を披露していただいています。ライブやコンサートの開催に当たっては新たに加入した1回生も積極的に活動に参加してくれています。はじめ広報活動中心でしたが、最近ではほとんどすべての作業を1回生にまかせています。しっかり者の1回生達。

今後のおとくらを担っていく彼らの活動にも期待です。



TOPICS-1

初となる湖風祭での出張営業

活動してから二年目にして初となる湖風祭の出張営業を行いました。メンバーのそれぞれが様々な不安を抱きながらも、会議を重ねて少しでも良い結果を残せるように努力していきました。学内での認知度の低い事に対してや、室内の出店という事で野外イベントの多い湖風祭でどういった工夫で客寄せをするかなどの検討に苦戦しました。

出店の当日は少し空模様が悪く、肌寒いくらいの天候であったためか、温かい珈琲を出していたおとくらはメンバーの予想を超えるお客さんの注文があり、驚きました。

湖風祭の出店用に用意したカップに工夫をしてみる試みも好評だったようです。テイクアウトも多いという事で、紙コップの周りに珈琲の熱で熱くならないよう、蛇腹状の紙とおとくらのロゴを配した帯を巻いて提供しました。



喫茶の雰囲気を感じれるという事で多くのお客さんから「かわいいね」と声をかけていただきました。チラシや看板等のデザインにもおとくらの喫茶らしさが伝わるような工夫もしていきました。またリーダー・安本の特技でもある、大道芸をしながらのチラシ配りで小さな子供さんのお客さんも多くみられました。忙しくてメンバーそれぞれが大変だったようですが、予想以上の売上げに皆が充実感と達成感を感じていました。来年も反省や経験を活かして出店してほしいです。

TOPICS-3

成果と課題

1・2回生の新たなメンバーも増え、ますます充実した活動をしてきたこの1年。ギャラリーで学生の展示をしたり、コンサートでは相手方からコンサートの要望を受けるなどこれまでの活動を継続しながら、新たな挑戦もできました。またまちの方に「地域の伝統的な祭りなどで学生の力を借りたい」と地元商工会の会議に誘っていただけられるようにもなりました。徐々に常連のお客さんもでき始めたおとくら。ですがまちのコミュニティスペースと言うにはまださみしい状態です。来年は、あまり達成できなかった昨年の目標、「外に出ていく活動の充実」や「地域の方々がもっと参加しやすいようなイベントの企画・開催」を増やしていきたいと思ひます。今後も工夫と努力を重ねてまちのにとってのコミュニティスペースとして成長していきたいと思ひます。

プロフィール

「おとくら」プロジェクトは、彦根市高宮町に拠点を置き活動するプロジェクトです。

活動拠点の「座・楽庵」はの喫茶・ギャラリー・蔵からなるコミュニティスペースで、毎週土日に喫茶の営業をしながら、1ヶ月毎の様々なギャラリー展示やコンサートなどのイベントを企画開催しています。

プロジェクト名の「おとくら」とは「音」と「蔵」の造語です。伝統的な蔵の空間がもつ和やかな雰囲気を大切にしながら、学生と地域の人々、ギャラリー展示をする作家、中山道を歩く人々などが、出会い、交流する場所づくりを目指しています。

高宮神社の前に店舗兼住宅を持つ加藤義朗さんが高宮町の地域活性化のために自宅の空きスペースを活用したいと県立大学非常勤講師である中西茂行先生に相談したことをきっかけにこのプロジェクトが始まりました。

学内コンペによって、現在ののおとくらの案が採用されました。

先生の指導を受けながら案を作りあげ、学生の力で改修しました。

平成21年夏に改修が終了し9月のオープン以来2年半ほど活動が続いています。

徐々に地元の常連さんもでき始め地域のコミュニティスペースとして成長しています。



TOPICS-2

つながりのーと

おとくらでは喫茶スペースに「つながりのーと」を置いています。これは「誰でも自由に」ということで感想やイラストを書いたり名刺を貼っていただいたりしています。このノートからいくつかお客さんの声を聞かせてもらいましょう。

・コーヒーとてもおいしくいただきました。素敵 cafe でゆっくりまったり。

・偶然立ち寄って大変楽しい思いをさせていただきました。版画の画題を求めて高宮宿を歩きましたが一度では見切れず再度きたいと思っています。

・山梨から来ました3～4年かかって中山道を歩いていません。ゴールは京都、鳥居本から高宮休憩することがなかったのでホットします。

・峰島先生の展示拝見させていただきました。素晴らしい竜の筆あと感動しております。又ステキなギャラリー私の大気に入りになり早速展示等やりたくなりました。

たまにこのノートをのぞくとお客さんのうれしい言葉にやけてしまいます。そしてまた喜んでもらえるように頑張ろうという力をもらいます。



おとくら喫茶
CAFE / GALLERY / WORKSHOP

OPEN : SAT・SUN 10:00 ~ 17:00

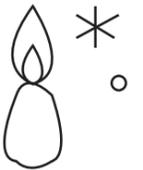
E-mail : otokura.kissa@gmail.com

HP : http://otokura.jimdo.com

〒522-0201 滋賀県彦根市高宮1121 座・楽庵

近江楽座

あかりんちゅ〜しん



2012年
3月31日

あかりんちゅついに!?! プロデビュー!

今年、助成金をもらわないSプロジェクトに申請しました。自己費用等で活動するため自由な活動が可能となり、それに応じて、より動きやすい環境をつくるために今まで曖昧だった、作業手順などをマニュアル化し、それぞれの役割分担を明確にしました。企画担当、イベント担当などそれぞれがそれぞれの責任をはっきり自覚し動くことで、スムーズかつそれぞれにとつての成長にもつながる活動ができました。そのような取組が認められつつあり、県内外で知名度は上がりつつあり、依頼イベントや体験教室などが増加した一年となりました。

とくに、依頼先と直接交渉および調整をし、謝礼や実費請求などもこなせるようになり、支的にも安定した活動を行うことができました。また、申請時の目標にも掲げていた「ろうそくの里帰り」は、浄土宗青年会との繋がりで「子ども信楽道場」に呼んで頂き、京都では総本山知恩院で40名の子どもを対象に教室を開き好評を得て、また、その後も県内のお寺で開催された道場にも呼ばれ、子供たちと共にリサイクルされていることを体感しながらの活動ができています。お寺との関係も広がりをみせている。



2011年の4月20日には、あかりんちゅが主催となり、交流センターにて、新入生向け「近江楽座説明会」を開催。入口ではキャンドルナイトも開催、道行く学生の足を止める役割を果たした。他の楽座グループと連携して企画するのは初めてのことで、お互いのプロジェクトを身近に知り合う良い機会にもなった。

さらに当日、NHK大津で放送されている「おつみ610」という番組の「ガッコウ通信」であかりんちゅの活動紹介の収録が同時進行でおこなわれ、慌ただしいイベントとなった

プロジェクト自慢

私たち、あかりんちゅはお寺やホテルなどからいただいた残燭を再利用してキャンドルを作り、キャンドルナイトイベントやキャンドル販売、子供向けのキャンドル作り教室を行っています。2008年2月に行われた彦根キャンドルナイトをきっかけに、お寺にたくさんある残燭の存在をしり資源の有効利用をしエコなキャンドルナイトをするため活動を開始しました。今年で、あ

What s AKARINCHU?

かりんちゅを立ち上げて下さった初代のメンバーは卒業してしましますが、今年も彦根キャンドルナイトに参加させてもらい、先輩方の意志を引き継ぎ、初心を忘れずに活動していこうという思いです。現在メンバーは女の子ばかりニ人。今年から様々な学科のメンバーが加わり、多方面からのアプローチをしていくことができそうです！まだまだメンバー募集中です。



けれど、充実した一日になった。また後日放送を見た視聴者の方から連絡を頂き残ろうの提供を受け、新たな繋がりを得ることができた。また、この日参加してくれた学生が今メンバーとして共に活動し、今活躍中です！

成果と課題

今年度は、イベント部門や商品開発部門等チーム内の役割分担を明確にしたことで各自が責任を持ち円滑な作業への工夫を心がけ、その中一人ひとりがそれぞれに、スキルアップを果たしたように思う。また団体としてしっかりとまとまりを持ってきたのと同時にひこねキャンドルナイトや「3つつながる東北へひこね」のような大規模な企画に携わる中で地域の人と関わりあつて何か一つのものを完成させる意味を再認識できた。また、初代あかりんちゅが卒業し、活動を受け継いで行くにあたって、自分たち主催のイベントを湖風祭以外の所でも、より展開していきたい。

あかりんちゅの活動を多くの人に知ってもらうこと大切であるが、活動をこつこつしていくことも大切だよ
(お寺キャンドル教室主催の方より)

これからもあかりんちゅと浄土宗青年会で未永く関わっていききたい
(浄土宗青年会の方より)

あかりんちゅは滋賀ではすっかり有名だね！(地域の方より)

地域の声

日本ではまだ非常用とかパーティ用としての認識の強い蠟燭を癒しや、エコのための道具として広めていけるといいですね。(KBS京都の方より)

またリサイクルキャンドルを作ってみたい。お寺の残燭のことなんてはじめて知りました。
(キャンドル教室参加者より)

Living Design Fashion Show “born”

発行日 2012.03.31

生活デザイン 15 期生

プロジェクト紹介

生活デザイン学科によるファッションショーも今年で15回目を迎えました。私達は毎年、滋賀の繊維産業を地域に発信するという目的に自分たちが学科で学んだ技術を掛け合わせ、滋賀県産の布を用いたワークショップ、デザインから制作まで全て自分達で手掛けた作品を用いたファッションショーといった方法で多くの人に親しみやすい形をとり活動しています。今年は「進化」をテーマに、時代の流れとともに変わってゆく世界や人間、この先の未来に待ち受ける課題等を織り交ぜたファッションショーを目指しました。

今年度の特徴

今年はファッションショーへの参加人数自体が例年より多く、メンバーにもそれぞれきちんと仕事が割り振られ、各自が協力し合った効率のいい活動ができました。また、メンバー全員が学科の同期生であるため仲もよく、「自分達が楽しいと感じて活動する」という根本的な部分を自然に体現できていたと思います。当たり前のことといえばそれまでですが、私たちの活動において最も自慢できるのはメンバーの仲のよさであり、それが今年の活動を成功に収めた一番の理由であると思っています。

NEWS

先日入稿した最終パンフレットが遂に完成しました。今年は昨年までの反省や問題点を洗い出してそれらを改善することを意識して制作に取り組みました。それまでは制作した衣装をメインに掲載して最後にご協力頂いた繊維企業さんの簡単な紹介を掲載しただけの作品集の色が強かったパンフレットを、ただの作品集としてではなく Living Design Fashion Show の最も根本的な理念である「滋賀の繊維産業を地域に発信する」という点を重視した、活動報告書を兼ねた冊子に仕上げました。具体的には、ご協力頂いた繊維企業さんのページに、その企業が主に扱っている繊維や織り方等の特色の紹介やインタビューを掲載しました。昨年度までは企業名と住所等しか表記がなかったため、今年のパンフレットは活動目的に基づき、より内容の濃いものに仕上がりました。今後は完成した冊子をスポンサー協力して頂いた地域のお店や繊維企業さんに配布、大学内にも配置させて頂き、多くの人に見てもらうことで情報発信の手段とする予定です。

成果と課題

今年は昨年までの反省点を改善することに特に力を注いで活動を行いました。具体的には、①一つ一つの作品を丁寧に作ること、②最終パンフレットの内容を改め活動目的により近づけること、の二つに注目しました。結果、作品を見てくださった昨年度の先輩方等から今年は作品作りが丁寧だという意見を頂き、パンフレットも滋賀の繊維企業さんが地域に発信したいことをインタビューに掲載した濃い内容のものに仕上げられました。

今年の反省点は活動を始動する時期が遅れてしまったこと、ワークショップの活動内容などを決定するのに時間をかけすぎたこと等です。また、私たちの活動は生活デザイン学科の3回生が行うため、毎年メンバーが総変わりします。そのため引き継ぎに関しても代表や会計のみでなく、活動メンバー全員が把握できるようしっかり次の代に受け渡すことが必要だと感じました。いずれの課題も引き継ぎの際に改善できる問題なので、来期の活動が決まり次第取り組む予定です。

活動内容

・ワークショップ

7月23日、30日、8月6日の3週にわたって滋賀の石山商店街で行われた石山夜市に参加し、お祭りを楽しむ地域の皆さんに滋賀の布を使用して制作した布折り紙に触れてもらい、折り紙をしながら滋賀の布について知ってもらうという内容のワークショップを行いました。周りの屋台などの出店とは趣旨が異なっていたため不安はありましたが、当日はお子さん連れのご家族を中心に予想を上回る数のお客さんに来て頂き、多くの方から楽しかったという言葉を受けました。



・ファッションショー “born”

9月20日 朴アート祭

10月8日 VivaCity Fashion Show

11月12日 秋湖風祭

上記日程でファッションショーを行いました。今年はショータイトルの born から一文字ずつ頭文字をとり、それぞれ Birth, Origin, Revolution, Next というテーマでくくった4部構成のショーになりました。最後のショーである湖風祭では作品数は89着となり、関係者数は100人を超える大掛かりなショーになりました。また今年は構成にとことんこだわって各部ストーリーを作りこんだため、観客側からは「今年のショーは見ていて面白かった」という声をたくさん耳にすることができました。ファッションショーは視覚に訴えるものであるため、見に来てくれたお客さんからそういった感想を得られたことは、私たちにとっては大きな収穫でした。



VivaCity ファッションショー



朴アート祭ファッションショー
(護国神社境内)



湖風祭ファッションショー

近江八幡の魅力 発見!

ワークショップの流れ

11月20日
近江八幡を探検しよう!
近江八幡の旧市街地を中心にチームに分かれてまち歩き

11月27日
発見をまとめよう!
まち歩きから発見したことなどをパネルにまとめる

12月18日
みんなに発見を伝えよう!
近江八幡の良いところや発見を伝える



ヴォーリスさんはやさしい人だと思った。建物も違いがあっっておもしろかった。

近江八幡を探検しよう!

まち歩きワークショップ初日。この日は近江八幡の旧市街地を中心にまち歩きを行いました。参加してくれた小学校四年生の子どもたち三人とそのお母さん方の二チームに分かれました。まず子どもチームは、ヴォーリス建築でもあるアンドリュース記念館でヴォーリス記念病院の事務

長である澤谷久枝さんからヴォーリスの医療に対する考えや病院施設の工夫について教えて頂きました。その後、ヴォーリス建築が建ち並ぶ池田町洋館街を散策しました。

お母さんチームは、近江八幡の古い町並みの中で歴史と共にあり続ける古き良きものを探しました。そしてヴォーリス夫妻に縁のある辻友子さんから教育についての取り組みや話をうかがいました。

みんなに発見を伝えよう!

みんながまとめたパネルや学生で考案した近江八幡の観光ルートの展示及び発表は、アンドリュース記念館で行いました。普段入れない所での発表だったので、たくさんの方に来て頂きました。子どもたちは緊張しつつも楽しく発表してくれました。



まち歩きで見つけたレトロなポスト

私たちは近江八幡の良さを発掘しようと活動を始めました。これまで行ってきた活動は、まちのコミュニティ作りとして、2009年のウィリアム・メレル・ヴォーリス展 in 近江八幡というイベントでの休憩所を作ろうと町家を改修しました。現在、その休憩所はカフェとして活動しています。さらに、地域の子どもたちに参加してもらい2009年にはヴォーリスについて、2010年には近江八幡にある西の湖の自然について学びました。そして今年は...

きりこワークショップ in 八幡掘り祭り



毎年9月に八幡掘とその周辺の路上や施設をロウソクの灯で照らすお祭りです。DIG'Sでは毎年あんどんワークショップを企画しており、多くの方に参加して頂いています。

灯がつなぐ みんなの絆

— 震災復興を願う想いを込めて —

仙台市を拠点に活動する市民団体からの呼びかけにより、南三陸町の伝統である、きりこを作るワークショップが八幡市内で行われました。私たちもその一環として、二日間に渡りカフェDIG'Sで、きりこのワークショップを開きました。ワークショップでは多くの子供たちが参加し、大盛況となりました。

また、マルチメディア

センターの方と協力し、大きなきりこを作るお手伝いもさせて頂きました。絆を表す縄のデザインが施された大きな灯りに、みんなの復興への願いが込められています。



いわきぼうけん映画祭

マルチメディアセンターの方と協力して、東北の幅広い世代が制作した短い映画をDIG'S内で上映しました。震災前の東北の美しい風景が映し出されており、震災復興を願う気持ちを高めてくれました。



バラ園再生計画 in 前田邸



二〇一一年四月三日、滋賀県近江八幡市土田町の前田邸にて、地域の小学生とその保護者を対象としたワークショップを行いました。

前田邸は近江八幡市に残る二五軒のヴォーリス建築に数えられ、国の有形登録文化財に登録されています。

その庭はかつては二百本のバラが植わるバラ園でしたが、現在は空地となつています。今回のワークショップではその再生に向けたバラの植樹を、地域の小学と一緒に行いました。



2011年度の成果と課題

地元の子どもたちだけでなくそのお母さん方とワークショップを行うことで、子どもたちが学んだことを知ってもらえて良かったと思います。そして、私たち学生が気づいた近江八幡の良いところをみんなで感じることができました。また、ワークショップを行うことで私たちの活動に興味を持ってもらえました。今年度の活動をいかして来年度はさらに楽しいワークショップを企画したいです。

今後の課題としては、ワークショップに参加してくれる子どもたちを増やして、一緒に近江八幡のことを知り、もっと興味を持ってもらいたいと考えています。そのために地元の方に来て頂けるようにカフェ営業を充実させ、交流を増やしていきたいです。そして、地元の行事に参加して私たちの活動を広めたいです。

守ろう 琵琶湖の在来種



滋賀県立大学の学生団体「県大 BASSER'S (バサーズ)」は琵琶湖の外来生物問題に学生として何かしたいとの思いから、釣り好き、魚好きな学生が集まって発足した。学生として他の学生や地域へ働きかけ、地元の水域環境を守ることを目的としている。主な活動は、琵琶湖の内湖における月2回ほどの外来魚駆除と在来魚類のモニタリング。獲った外来魚はできるだけ胃の内容物や耳石による年齢の確認も行っている。そのほか、侵略的外来植物ナガエツルノゲイトウの駆除や、外来魚駆除釣り大会の自主開催、学生向けの勉強会や近隣大学への出張講義、大学祭でのブース出展もしており、地域からも今後の活動の展開が期待されている。

県大 BASSER'S

全国ネットに新規参入!!



昨年十一月、外来魚問題を解決すべく全国各地で活動している市民団体が集まり、それぞれに情報交換をするネットワーク「全国ブラックバス防除市民ネットワーク(通称・ノーバスネット)」へ県大 BASSER'S が新規参入しました!

全国各地で数年から十年以上も継続して外来魚の駆除、在来種の保全活動をしている市民団体のネットワークに発足一年ちよつとの団体が加盟するのは異例。ノーバスネットの理事長や各団体の代表からの信頼の下、加盟することができました。発足して間もない団体にしては多岐にわたる活動が短期間に展開され、外来種問題解決のためには欠かせない啓発活動も外来魚駆除釣り大会や近隣大学への出張講義、ブース出展といった手法で行われてきました。

こうした地道な活動ながら着実に活動の幅を広げ、多くの学生や地域住民を巻き込みながらの活動が評価され、ノーバスネット加盟団体が行う「外来魚のいない水辺づくり」イベントでは、早くも京阪地域の常連となりました。

生態調査し外来魚駆除

県大 BASSER'S ではただ外来魚を駆除するのではなく、その生態を調査し効率的な駆除戦略を模索しています。また、駆除効果を調べるため、外来魚の食べられている在来種のモニタリングも行っています。学生団体でもできる駆除活動のモデルとなるべくチーム一丸となって精力的に活動しています。そのおかげで、今年度は活動を通して約九十kgの外来魚を駆除することができました。



地域の声

● 神上沼は外来種が多いところです。ブラックバスやブルーギルなどの外来魚やナガエツルノゲイトウの外来植物もいて駆除活動が大変です。そうしたところに、若い力が入ってきてくれて協力体制が出来上がってきて良いと思います。滋賀県立大学の皆さんが定期的に神上沼の調査・観察してくれています。今後は、いわゆる「池のメンテナンス」という役割を地域と一緒に担って行って欲しいです。

(薩摩町自治会長 村井光雄)

● 滋賀県立大学の県大 BASSER'S さんは聖泉大学でのCLCセミナーというイベントで外来魚問題についての講座を開いていただきました。講座では琵琶湖の外来魚問題についてわかりやすくクイズも交えて話して下さり、参加した様々な人に楽しんでいただけました。このように他の大学と連携することは大切だと思います。今後もよろしく願います。

(聖泉大学 CLC 実行委員 北川晃浩)



今年を振り返って

今年度、県大 BASSER'S は学内学外問わず、様々な活動をしてきた。外来魚駆除と並行した生態調査、駆除や調査に必要な知識を補うための勉強会の開催行政と協力して行った侵略的外来植物ナガエツルノゲイトウ駆除事業(通称・エイリアンバスター事業)への参加、外来魚駆除釣り大会をはじめとした様々な場面での啓発活動。ただ生態系に悪影響を与える外来魚の駆除をしてきたわけではなかった

そして、この活動は我々学生だけでなされたのではない。地域の水辺での駆除活動は地域の人々の協力なしには進められないものである。地域の人々と共に駆除釣り大会やエイリアンバスター事業など、一緒に駆除活動を進めることができた。また、直接一緒に活動をするだけでなく、我々が神上沼で駆除活動を行ないやすい体制作りをしていただくなど、外来種問題への意識を持って支援をしていただき間接的に地域と共に活動を進められたと感じている。

一年間の神上沼での活動を通して、県大 BASSER'S と地域との関係性も深まり、地域から認められるようになってきたと感じている。これからの地域と共に地元の水辺を守っていききたい

古民家楽座新聞

発行日：2012年3月31日

七曲がり町あるきイベント開催

二〇一二年十一月二六日に彦根市の七曲がりにてNPO法人Linsさん主催のイベントが行われました。私たち古民家楽座のメンバーも参加させてもらい、七曲がりにある、旧村岸家の古民家を公開説明をしました。

当日は、地元の方や古民家に興味のある方々が多く来て下さいました。

古民家の中では、参加者の方々に説明以外にもお茶を出したり、彦根市の昔ながらの遊びであるカラムで遊んだりして、楽しみながら町の方と交流することができました。

古民家楽座が行った七曲がりの町あるきイベントでは、七曲がりにある伝統的な民家を1軒1軒説明していき、歴史や建物の特徴など古民家の魅力を地域の方に発信することができました。

このイベントで、古民家楽座の目的であった町の魅力を住民の方に理解してもらうことができる良い機会となりました。



町歩きイベントの様子



地元の子供たちとカラムで遊ぶメンバー

プロジェクト紹介

私たち古民家楽座では、民家や景観の保存・活用をテーマに活動しています。イベントや調査を通じて、古民家の魅力を発信し、地域の方々に古民家の魅力を再発見していただくきっかけ作りができればと、考えています。

今年度も昨年と同じく、彦根市内での町あるきイベントの開催、白谷荘民俗資料館開館に向けての民具調査、整備を中心に活動してきました。今後も古民家の調査や町あるきイベントの活動を続けて、古民家の魅力を追及して行き、地域の方々に町の良さを発信して行きたいと思っています。

白谷荘民俗資料館

昨年、高島市の白谷荘民俗資料館の再開に向けて民具や資料の調査を行っています。もともと資料館であったのですが、調査を進めて行くと、多くの民具や学校の教科書が出てきました。調査は毎月一回ずつ行っていますが、予想以上に民具や教科書が多く、調査が大変な時期もありました。今年の十月にはすべての民具の調査が終了しました。現在は展示の作業を進めています。



古民家楽座の主な活動

- 白谷荘民俗資料館での調査(昨年～)
- 五箇荘金堂町あるきイベント(2011年8月)
- 七曲がり町あるきイベント(2011年11月)
- 河原町・芹川地区伝統的建造物群町あるきイベント(2012年3月)

白谷で合宿!

二〇一二年八月二日から九月一日にかけて、白谷荘民俗資料館で掃除を主とする合宿を行いました。この合宿には、古民家楽座のメンバーだけでなく、市川ゼミや武田ゼミの学生と共同で2日間合宿をしました。2日間で2階と3階の部屋を掃除しました。

2階も3階もすすやホコリだらけでメンバー全員真っ黒になりながらも作業をしました。床掃除をすると雑巾や雑巾を洗う水がすぐに黒くなるほど汚れていました。2日間とも朝から作業をしていて大変なところもありましたが、部屋がきれいになっていくのを見ると、掃除している側も気分が良くなりました。

夜は全員で食事をして盛り上がりました。楽座のメンバーだけでなく、他のゼミの学生とも合宿で仲良くなり、交流できたことはとても良かったです。

資料館再開に向けてみんなと一丸になって力を合わせて頑張り、同じ目標を持つもの同士が一体となったことで効率良く作業を進めることができました。



地元の声

十一月に七曲がりのイベントと一緒に参加した七曲がり仏壇店の奥田新悟さんからメッセージをいただきました!

「村岸家ではお世話になりました。古民家楽座の取り組み興味深かったです。」

町あるきイベントのおかげで、子どもたちとか、普段歩いている姿を見かけない人々を引きつけられることができたので良かったと思います。古い町並みの散策はまた単独でも開催して欲しいなと思います。

私達が行った町あるきイベントに地域の方が満足していただけたという声を聞けて、イベントを開催して良かったです。

課題と成果

今回も七曲がりや河原町・芹川地区で町あるきイベントを開催できたので古民家の魅力について地域の方々に発信することができました。また、白谷荘民俗資料館の民具調査も終えることができました。

しかし、町あるきイベントの準備については遅くに取っかかりだったので、十分に古民家についての勉強や説明ができませんでした。

来年度は一年のスケジュールを考えて計画的に行動していきたいと思っています。

“縁”でつなぐプロジェクト

SenSというチーム名はプロジェクトの舞台である下石寺のSと縁側のe、学生のsを組み合わせたもので、地域と学生を結びつけることに主眼を置いて活動を行っている団体である。本プロジェクトでは彦根市南部にある下石寺集落内にあるエコ民家三号館をコミュニティスペースとして改修し、集落の人や地域の方々が気軽に立ち寄ることができる場所を作り出すことを主な活動内容として一年間活動を行った。

プロジェクトは大きく調査、改修、フォーラムの開催、報告書作成で構成され、十月八日から十日にかけて古民家改修ワークショップを開催、無事に改修を終えた。その後、十二月二十八日には改修したスペースを利用した凧揚げワークショップを行い好評を博した。

また、集落の祭りやひこにゃん田んぼアートといった下石寺集落のイベントにも積極的に参加を行い、近江楽座の中間報告イベント「楽ゼミ」では、地域の人とめっちゃ仲がいいで賞を受賞した。

学生
Students
engawa
Shimoishidera
縁側
下石寺

“縁”側でつながる人の“縁”

発行日
2012年(平成24年)
3月31日 土曜日

一年間の活動を通じた成果と課題

私たちは、今、古民家を改修することで、地域のみなさんが気軽に利用できるようなコミュニティハウスを作りました。これは、単なる「ハコ」にすぎません。これからの課題は、この「ハコ」をどのように有効利用していくかという利用方法や、運営方法などの「仕組み」を考えていくことです。人が住まなくなってしまう建物を、人の活気があふれる空間に生まれ変わらせることは、容易なことではありません。ここをスタート地点として、エコ民家三号館の歩みは始まり、時間をかけて、みんなで明るい空間を作っていきたいです。



改修後のエコ民家三号館での慰労会の風景

今年一年間を通して、SenSとしての活動のメインは何と言ってもエコ民家三号館の改修ワークショップでした。実測、図面おこし、改修案の提案、集落アンケート、現場作業：多くのメンバーにとって初めての作業が、そこにはたくさんありました。その中で、地域の人たちと相談し協力して、数カ月の時間を費やし、みんなで一つのものを作り上げる喜びを知りました。未知の体験に戸惑いながらも、共同作業をする楽しさを体感しました。地域に眠る魅力ある古民家を、もっと活用していきたいという思いも芽生えました。そして、住民のみなさんの熱い集落愛にあてられ、活気ある地域の素晴らしさを学びました。

石寺と共に



2011/10/10 改修ワークショップ後、集合写真。

私たちの活動は四月の太鼓登山から始まりました。ゆりかご水田、ひこにゃん田んぼアート、古民家改修事業。様々な活動を通して石寺の人々と徐々に交流を深めていきました。このプロジェクトに携わらなければ、出会うことのなかった人々。石寺の人々との出会いは私に多くの事を教えてくれました。すべき事を伝える、時には頼る、責任を持つ。当たり前のように身に付いていなかったのです。

SenSはまだ終わっていません。石寺での行事は、毎年あります。古民家の改修も細部が残っています。一年取り組んだだけで満足せず、次の目標を掲げたいかなくてはなりません。

石寺の将来を石寺の人々と共に考え、共に活動していく。地域再生とは何なのか。自分達のすべき事を再認識する必要があると思いました。

みんなを惹きつけ、つなげる縁側

集落のエコ民家三号館の「縁側」です。チームの名前の「e」という文字も縁側から取ったもので、それほどまでにこだわりのある場所です。日当たりも良く、天気の良い日にはひなたぼっこにもってこいです。縁側を設置したエコ民家には掘り炬燵もあり、集落の人や学生が交流することを目的に作られています。

縁側の材には古い舟板を使用し、それに柿渋を塗って、味のある外観に仕上げられています。一年間かけて様々な人が関わり、それぞれの思いを込めて作業し、完成させることが出来ました。ぜひ一度、下石寺のエコ民家三号館まで見に来て下さい。

地域の方の声 下石寺まちづくり委員会 西川さんより

平素は、県立大学が地域貢献策の一環として当町を研究対象にしているんなテーマについて研究活動をしていただき、また県大の先生・学生が当町に居住して自治会活動に積極的に参加していただいておりますことに対しまして、厚くお礼申し上げます。お陰様にて自治会の課題解決に方向性を与えていただいたり、自治会に活力を与えていただいておりますこと、大変有難く深く感謝申し上げます。

今回、県立大学より県大学生が集落ステイしている古民家の母屋を当センターに改修する提案があり、町づくり委員会と共同で実施することができました。実施に際しては、調査・設計・改修等、県立大学が主体的に行っていただき、センターの活用としては、まだ完全に仕上がっていない昨年の12月28日、立派なセンターの活用として、住民が気軽に立ち寄り、語り合うことができる憩いの場とする。高齢者と子どもたちの世代間交流の場とする。これら等を通じて、人と人との交流の場とする。県立大学と子どもたちの健全育成等を図り、地域の活性化に繋げていきたいと考えています。具体的な活用は、運用基準等を作りながら逐次実施していきたいと考えています。今後とも当町下石寺町の「町づくり」に対しまして、ご指導・ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

有難うございました!こちらこそこれからもよろしく申し上げます。 SenS一同より

コミュニティスペースとしての活用を目指す TTP の拠点、八百秀アパートの改修が進み、今年度ははじめて一箱古本市というイベントを開催することができました。一箱古本市とは古本のフリーマーケットで、企画運営は私達 TTP で行い、出店者・参加者は広く一般に募集しています。古本市などのイベントを通じて、参加者同士・参加者と学生など、人と人とのつながり・地域のつながりが八百秀アパートで創出されることを期待して、このようなイベントを開催しました。地域の人の助けを受けながら学生たちで改修した拠点を、今度は地域の人達のために使うことができればと考え、今後も一箱古本市をはじめとする、地域交流の核ともなれるようなイベントを八百秀アパートで行っていきたいと思います。

色人図鑑プロジェクト

「色人図鑑」とは、まちで働く職人の人にインタビューを行い、働く自分やその職に対するイメージを色に例えてもらい、その人の熱い思いや職のことを聞き、記事にするというプロジェクトです。今年度は、居酒屋「魚保 keiji」を切り盛りしている北川恵司さんをインタビューしました。現在は、多賀でお茶の教室をされている河本恭子さんの記事を作成中で、5 月には完成の予定です。どちらの記事も 1 回生を中心に進められています。

たがのぞき探偵団プロジェクト

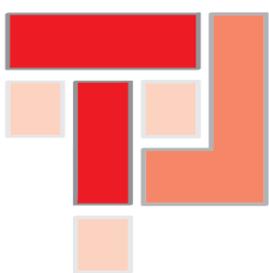
今年から発足したプロジェクトで、様々なテーマで多賀を探検したり、多賀のおもしろいところを発見したりして記事にしていくというプロジェクトです。今年度は、多賀の町を歩いて、町に隠れている「顔」に見えるものを探そう！という記事を作りました。現在は、多賀の名物土産『糸切り餅』に合う飲み物について調査し、記事を作成しています。作成した記事は、多賀大社前駅近くのもんぜん亭さんに図鑑として置かせてもらっています。

八百秀アパートプロジェクト

「八百秀アパート 201 号室」を活動の拠点とすべく、改修・運営していくプロジェクトです。今年度の夏期には古本市開催のために、押し入れ・キッチン・トイレ改修を行いました。秋期には 201 号室にて念願の古本市を開催しました。

各種イベントへの参加

今年度も、多賀町で行われる様々な行事に参加しました。具体的には、秋に行われる万灯祭に出店を出したり、ふるさと楽市でブースを借りて子供のためのワークショップを催したりしました。多賀の行事に参加することで、多くの人に自分たちの活動を知ってもらったり、多賀にいる人と直接コミュニケーションをとったりしています。



活動報告ニューズペーパー

Taga-Town-Project

03 ▶ ちょっときいてよ！プロジェクト自慢 楽しいから続く！力がつく！

自慢というかプロジェクトの魅力のひとつとして、プロジェクトの進め方があります。それは、プロジェクトを進めていく上で、一人一人が興味を持ったことを実践して、その中で様々な能力を身に付けていることです。具体的な例として、改修をするにあたっての危機管理能力や、町の祭りやイベントに参加する積極性、記事を編集する上で必要なイラストレーターやフォトショップを扱う能力、そして、そのプロジェクトを進める責任感などが挙げられます。自分の好きなことや興味のあることだから、最後までつづけられるし、より一層将来に役立つ力を身につけられます。さらに、様々な学科の人が所属しているので、メンバーと協力して作業をしたりすることで色々な分野の知識をたのしく身につけることができます。

04 ▶ 地元の声 アツい！多賀の人々

色人図鑑プロジェクトをはじめとして、TTP の活動を行っていくなかで、たくさんの方の多賀のまちの人にお世話になっています。特に、多賀で設計事務所を開かれておられる平居晋さんには、八百秀アパートの改修をはじめとして、私たちの活動について様々なアドバイスを頂いています。多賀には元気で魅力的な人が多く、まちの人と話をしているだけでも人生の勉強になります。活動を通じて仲良くなった、パワフルな多賀のまちの人たちとお付き合いは、活動のなかでのわたしたちの楽しみともいえます。

05 ▶ 1年間の活動を通じた課題と成果 積極性と計画性の両立を

一年間の成果としては、メンバー一人ひとりが積極的に活動に参加できた点です。どうすれば多賀の魅力を発信できるか、それぞれが思案し、今年度も新しいプロジェクトが次々と発足しました。その中には、一回生が主体となっているものもあります。上回生の命令に従うだけの受動的な活動は、そこにはありません。課題としては、学生一人一人が伸び伸びと活動している分、締切意識の共有が果たせなかったということが挙げられます。スケジュールが計画通りにいかず、遅れがちになった点は反省すべきことです。スケジュールを遵守する意識を持つことは、責任感の醸成にも繋がります。今後の活動では、各人がより一層計画性を持つように、気をつけたいと思います。

▶ Big News

一箱古本市開催！



信・楽・人新聞

2012年(平成24年) 3月31日 土曜日

登り窯ギャラリー Ogama リニューアルオープン

—信楽の新たな注目スポットに—



信楽人とは?
信楽人とは、滋賀県立大学の有志の学生が集まったグループです。信楽町をフィールドとして、今年で結成四年目です。メンバーは環境科学部の建築を学ぶ学生と人間文化学部でデザインを学ぶ学生が主です。活動内容は四年間で徐々に広



平成二十四年四月、登り窯と周辺施設を改装した「Ogama(おがま)」が半年の再改装を終えリニューアルオープンした。散策を楽しむ観光客や近隣の人が「ほっ」と出来る場所として親しまれている。「Ogama」は、滋賀県甲賀市信楽町長野「信楽窯元散策路」のろくろ坂頂上にある登り窯を中心とした複合施設

で、現在敷地内を管理する明山陶業と「信・楽・人」が共同で平成二十三年から改装をしている。Ogamaの登り窯は昭和初期に建造されたものと言われ、多くの陶器を焼成してきた。現在は使われていないが、大屋根があり保存状態がよく、その圧倒的な存在感に訪れる人々は顔を輝かせる。同年十月に開催された「信

楽まちなか芸術祭」に合わせて第一期工事を終え、期間中は登り窯周辺でパネル展示、元作業小屋の一階でカフェとショップを運営した。来訪者から「登り窯を眺めながらコーヒーが飲めるなんて贅沢」「また来たい」といった声が寄せられたことから、イベント後の半年をかけて再改装作業を行った。

イベント中は白漆喰と黒い柱梁である店内だった一階は、カフェのための水道設備他を入れた上で、黒を基調とした落ち着いた雰囲気に変わり、四人掛けのテーブルで友人や恋人とじっくり話すのもよし、登り窯を眺めながら一人の時間を過ごすのもよし、という「人」が主体の空間を目指した。

がついていき、初期は建物の改装作業が主でしたが、shiroiroirieができ、ギャラリーの企画運営、接客、印刷物の作成、Ogamaでは、歴史の調査、パネル作成、など今では多岐にわたっています。普段学生は学校では設計演習など図面や模型などの課題でものを作っています。が、学校ではできない、実

物を作るということ。また作ることと社会とのかかわっていくことを通して、もの作りの大変さや面白さを学ぶことができます。プロジェクトには多くの専門業者さんとかかわることができ、現場で学ぶことができるといって貴重な体験を通して学生は飛躍的に成長を遂げ、一年が過ぎると見違えるほどです。



二階は明山窯の商品を中心としたショップとなっている。白い壁と梁組が開放感があり、こちらは「もの」を主体としている。季節ごとに商品が入れ替わり、この一年で二、三度訪れるリピーターも。十二月にはカフェのとなりアトリエが完成し、初の陶芸教室を開いた。来年度からは敷地内の母屋の改装に着手し、

コンセプトである「人の集える場」への手ごたえと課題が見えた今年度。計画はまだまだ続く。



ゲストハウスを開く予定にしている。改装計画が達成されれば、「みる」「つかう」「つくる」「かう」「すこす」といった焼き物を中心とした信楽体験の一体化が実現する。



雑誌掲載 ぞくぞく!

今年度はこれまでの活動で生まれた二拠点相次いで雑誌に紹介され、近畿圏だけでなく全国の書店に並んだ。

旅行情報誌の定番「じゃらん(リクルート)」「るるぶ(JTB)」... shiroiroirieに加えOgamaも各雑誌会社から掲載依頼が次々と舞い込んだ。特にOgamaは巨大な登り窯が地域の新しいランドマーク。滋賀の地方情報誌「Hotori」では表紙を飾るなど注目度は抜群だ。現地ならではの体験や土産が注目される近年の観光業界。これからさらに多くの人が訪れるのではないかと期待が高まる。同時に、紹介を促し、計画の継続や質の向上などを図り、まちと一緒に信楽を盛り上げてゆきたい。

ものづくりが根付くまち信楽。活動の中で関わるほとんどの日ごろ陶器づくりをしている職人の方々だ。今年も様々な場面でお話しする機会があり、メンバーは大学では話す機会のない

「若い人からはいい刺激をもらっている」

立場・年代ということもあり刺激を受けることが出来た。昨年に引き続き「Ogama改装計画」で深く関わりのある明山窯の九代目石野さんからは次のようなコメントをいただいている。「しがらきが信楽人に協力を頂いてから5年



新プロジェクト

「窯元散策路サイン計画」始動

来年度の中心に

窯元散策路内の窯元の女性の集まり「おかみさん会」から今年度後期に新たな依頼を受けた。「サイン計画」である。日ごろから窯元散策路をよく歩きたいと考えておられるみなさんは、訪れる方々から「道に迷いやすい」「どこにあるかわからない」といった声を聞き悩んでおられたそうだ。自分たちでできることから、と動き出した「おかみ

さん」たちと共同で「わかりやすく・たのしい」サインをを目指す。イベント時には約100名にアンケート調査を行い、現状把握。それらをもとに、案を練っている。来年度の中心的活動になる予定だ

課題も

毎年、人為不足を抱えながらも、少人数で様々な活動が行えたり、プロの職人の作業風景を見ることが得られた知

識があった。また、今年度は、信楽という町にプロジェクトメンバーの一人が常駐するという、より地域とのつながりがうまれたことで、学生と地域の人たちとがより近いところで意見の共有をすることができた。しかしながら、そういった活動をサポートする面(金銭面や学内への呼びかけなど)が力不足であったことは否めない。そして、もともと自分達の活動としてアトリエ改装作業を計画していたものの、これを業者へと途中変更することとなったのは、もともと、計画時に自分たちが本当にできる範囲を把握し、計画、実行へと移していかなければならない。また、前途で述べたことに対して、チーム内での意見共有をミーティングなどによって活発に行っていたいかなければならない。

ななちよよ新聞

発効日

2012年3月31日



パンフレット完成！そしてお披露目

今年度の新事業として計画した、七曲りのパンフレット「ななマップ」が完成しました。このパンフレットは仏壇職人さんについての紹介と、七曲りの地図が一緒になったパンフレットです。もともと、前年度からの事業の七曲りをテーマとした紙芝居の読み聞かせ活動のなかで、紙芝居を見てくださった方から、七曲りや仏壇職人さんについてさらに深く知りたいと質問をいただけることがあったので、それならば、仏壇職人さんや七曲りについて紹介するパンフレットを作ろうと計画していました。この計画を七曲りのZOO

さんにお話したところ、これを用いた七曲りでのイベントを発売してください、七曲りの地図もつけようということになりました。

パンフレット制作のために、七曲りに住む仏壇職人さんに仕事についてお話を聞きに行ったり、マップには何を載せたらいいか考えるために、何度も七曲りに行きました。そのたびに七曲りの新たな魅力を発見することが出来ました。

昨年11月29日(土)、私たち「ななちよよ」は彦根市七曲りで行なわれた「そうだ！七曲りに行く」というイベントに参加しました。この日は12月にもかわらず快晴で、七曲りや、その他の地域から、多くの人がイベントに足を運んでくださいました。

このイベントに、ななちよよは七曲りで活動しておられるZOO法人「ZOO」と、企画するところから関わってきました。後に七曲りの仏壇協会さん、七曲りに住む方などとも一緒にイベントをどうしたら盛り上げられるか会議を重ねました。

ななちよよはイベント内で、パンフレット完成お披露目を兼ねて、パンフレットの七曲りの地図を使って、スタンプラリーを開催しました。七曲りに点在するチェックポイントには、それぞれをイメージしたスタンプを自分たちでつくりました。また、イベントらしさがでて、イベントが盛り上がるようにと、七曲り中のイベント会場と、昔ながらの手押しポンプを黄色い旗やリボンで飾り付けました。

当日は私たちが想像していたよりも多くの方が参加してくださいました。スタンプラリーにも子供たちを中心に楽しんでいただけました。

直前は準備に追われる日々で忙しかったのですが、七曲りの方々と協力しながら、会議などを通して何度も交流を重ねることで、今まで以上に七曲りと深く関わる事ができました。また、このようなイベントに企画の段階から参加するという、貴重な体験もすることができました。



地元の人の声

パンフレット制作に対して、七曲りのZOO法人「ZOO」さんなどを中心に七曲りに住む方たちから、多数の期待の言葉、意見、要望をいただきました。パンフレットの仏壇職人さんの記事を書くにあたって、職人さんの所に、お話を伺いに居たところ、快くパンフレット作りに協力してくださいました。皆さんにお披露目した際には、「手描きっぽい感じがよい」といううれしい感想や、「ここがおかしいんじゃない?」というありがたいご意見をいただきました。「ななマップ」が今の形になることが出来たのは、これらの方々のお陰です。地域の皆様の声援を糧にして、ななちよよはこれからも七曲りを伝える活動を頑張っていきます。

こんにちは！ななちよよです。

私たちななちよよは彦根市七曲りという地域で活動しています。七曲りという通りは、彦根市岸側沿いにあり、古くは中山道から彦根城下町に入る街道として、地域文化を育んできました。七曲りには、彦根の伝統産業の一つ、彦根仏壇の職人さんが暮らしていたり、また歴史を感じさせる古民家が残っています。そんな七曲りですが、現在ではそこに根ざしてきた文化が取り上げられることが少なくなっています。ななちよよはそんな仏壇や、その職人さん、そして七曲りをもっと多くの人に知ってもらいたいと考え、活動をしています。

今年度は、七曲りの仏壇職人さんをテーマとした紙芝居の読み聞かせ活動、七曲りをよく知ってもらうためのパンフレット制作を中心に活動してきました。

ななちよテレビ初出演！

七曲りには、昔ながらの建物が残る、どこか懐かしい



感じのする町並みがあります。ちよっと心が落ち着くような、そんな場所です。同じように、ななちよよも基本的にほんわかとした雰囲気です。人数も少ないので、いつも和気あいあいと活動しています。昨年8月、「おうみをDONAZO」で彦根市紹介の中でななち

今年度を振り返って

今年度は七曲りのパンフレット制作という新事業に取り組みました。前年度までの紙芝居制作や読み聞かせでは、七曲りに住む仏壇職人さんにスポットを当てて活動していました。それを今度は七曲り全体に広げるといって、私たちななちよよのメンバーにとって、これまでとはちがう一年となりました。パンフレット制作は、なんとか完成し、12月には多くの人にお披露目することが出来ました。また、パンフレット制作と並行し、七曲りでのイベントの企画にも取り組みました。イベントに企画段階から参加するということは初めての経験でしたが、多くの人の甲斐あって、実施することができ、成功にもついていたと考えています。

これら新しい取り組みは、ななちよよの活動の幅を大きく広げることが出来たのではないのでしょうか。また、これらの活動を通して、今まで以上に七曲りの皆さんとふれあえたと感じています。

一方、新事業にかかりきりになってしまったせいで、前年度からの紙芝居の読み聞かせ活動がほぼ行なえなかったことが反省に上げられます。読み聞かせは私たちの活動の大きな柱なので、これからは七曲りのことを多くの人に伝えたいという想いを持って積極的に活動していくことが必要だと考えています。



よも七曲りで活動している大学生のチームとしてとりあげていただきました。テレビに映るといってもあり、取材は緊張しましたが、そうやって少しでも、七曲りを多くの人に知っていただくお手伝いができればいいなと思っています。



ラリレトロ口は、昔懐かしい能登川商店街の中にある昭和の雰囲気あふれたカフェです。懐かしい雰囲気ばかりではありませんか？能登川で、お待ちしております。

なつかしい昭和を再現。商店街を元気づけたくて。

プロジェクト始動

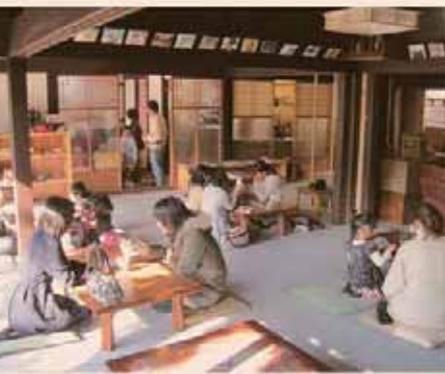
私たち能登川は、3回生5人、2回生5人、1回生1人のメンバーで構成されています。2010年秋、3回生が授業の一貫で、能登川商店街活性化に向けた企画をした。これが能登川商店街との出会いであり、プロジェクト始動のきっかけだった。

能登川商店街は、懐かしい雰囲気が漂っているが、人通りが少なくどこか閑散としていた。そこで「なつかしい雰囲気を活かした昭和のカフェを媒体に、能登川商店街の活気を取り戻したい。また「昭和の懐かしさを思い出してもらいたい」と思った。その結果、「能登川を魅力的にさせる会」という意味で「能登会」を結成した。



2010年、能登川駅前、子育て支援の場及び商店街の新しい発信の場として、古民家を回収して作られた「子民家 at 10k0 for」。私たちはこの場所をカフェを運営する場所として借りた。そして、子どもや高齢者、さらには商店街をつなげる事業を推進していくことにした。

キーワードは、学生や若者にとっても懐かしくもあり新しい視点もある「レトロ」。カフェの名前は、そのキーワードを用えることに。そして子ども達にも覚えてもらえるように、語呂合わせのよい「ラリレトロ」に決まった。能登川商店街は、再開発が入っていないため、古い建物や看板、モノ等が残っている。そこで、最近の商店街にはない「なつかしいあたたかさ」を活かした取り組みをする。能登川商店街ならではの発信ができる。また、だから、メニューには昔ながらの「ふなやき」やクリームソーダなどを取り入れた。また、部屋のインテリアやボスレコードやボスターなど、食器はなるべく能登川商店街の方に借りて、昭和の雰囲気を演出している。



期待できる効果は主に3つある。
①学生がレトロ調査やカフェの運営において関わることで、商店街に刺激を与えることができる。また、学生と商店、商店と商店に繋がりができる。
②お年寄りには、昔懐かしいモノや食べ物、音に触れることにより昔話に花が咲いたりなど、交流の機会が増え、元気になることが予想される。
③子どもたちは、駄菓子コーナーやメロンコトといった新世代までしか知らないモノコトに触れることで昭和を、楽しい場所として再認識することが出来る。
こうして、昭和を知らない平成組の奮闘が始まった。

ちよっと聞いてよ、レトロ自慢!

圧倒的なレトロ感

私たちのプロジェクトの自慢は「古民家の空間を活かした圧倒的なレトロ感」だ。プロジェクトのモチーフとなっているレトロを追求することは、平成生まれの私たちにとって難しかった。しかし、メンバー同士でレトロな物を持ち寄り、能登川の方々に協力していただくことにより、2年配の方にも「懐かしい」と言っていただけの空間を作り上げることができた。店内で流れているレコードも能登川商店街の方から貸していただき、レトロを演出するためには欠かせない存在となっている。

まだまだ発展途上のプロジェクトだが、能登川の方々と協力して作り上げた「レトロな空間」は決してどのチームにも負けない、私たちの自慢だ。



BIG NEWS



現在の活動ができてきていること、そのこと自体が私たちにとってのビッグニュースだ。

もともと授業で能登川の古民家の活用方法の提案を行った。授業が終わってからは、これにどうやら、何か本当に能登川のためにできないかという事で能登会を立ち上げ、カフェオープンに向けて動き出した。

更なる成長へ

月1回の頻度でカフェを定期的に運営したことにより、一部の方々に活動を覚えてもらうことができた。また、毎月テーマ性を持たせて運営したため、濃いサービスを提供できた。来てくださったお客様には満足していただけたのではないかと。一方で課題もある。能登川商店街や外部においての認知度が十分でないことや、お客様を商店街の回遊に誘う取り組みが不足していること。メンバー全員が商店街の方々やお客様とコミュニケーションを図れないことが挙げられる。

①今後の運営では、取り組み、広報活動を十分に行うこと
②商店街の回遊を促進する取り組みを充実させること
③メンバー全員が商店街の人々やお客様と積極的にコミュニケーションをとること
④求められるだろう。今後パワーアップしていくだろうプロジェクトの取り組みを、期待していただければ。



昭和のカフェ、ラリレトロには、小さな子供からお年寄りまで、男女問わず、様々なお客様が来てくださる。駄菓子を買いに来たり、珈琲を一杯飲みに来たり、ランチをしに来たりと、目的は様々ではあるが、カフェにおいて、つながりを形成している点においては共通だ。
ここでは、私たちスタッフやお客様同士の会話が広がる。会話は、「どちらから来てくださったのですか?」という簡単な言葉のやりとりから始まり、無限に広がっていく。昭和の思い出話に花がさくこともあるし、私たちのメニューに対して「昔の駄菓子はもう少し分量があったよ」とか「昔は卵を混ぜたりしたもんだ」とアドバイスをくださることもある。
小さな子供は、駄菓子を買って、おいしそうに食べたり、「これなあに?」と不思議そうな顔で尋ねたりする。大人はそれを見守り、子供に「これはね」と昔を伝承する。
お客様全員とは話しこめないのでも、各テーブルにノートとペンを置いておくこと、とても昭和な雰囲気が漂っていました。レコードなんて久しぶりに聞きました。また来ます」と書いてくださった。また商店街の方に、チラシを持っていったり、食料調達に行ったりしたときには、「主婦にも来てもらおうかな」といって、チラシにただ券や割引券をつけるのいいなど運営のアドバイスから、昭和時代の話まで教えてくださった。
これらの声すべてが私たちのモチベーションにつながってきたし、私たちはこの声に、本当に助けられたのだ。レトロカフェに関わる人々のおかげで成長できたことに、感謝したい。

みらいかんじゅく 未来看護塾



チームのビッグニュース！

2月20日～23日にかけて全学共通教育推進機構所属の鶴飼先生のご指導の元、宮城県南三陸町田の浦地区で「田の浦復興ワカメまつり」を開催しました。

昨年末ごろにお話を頂き、何をやるのかなど全て白紙の状態からスタートしました。鶴飼先生や「ほたてあかり」メンバーの方々と話を進めていき、2月20日の夜に出発し高速を走ること15時間後、田の浦に到着しました。そして田の浦に到着後、田の浦の地区の周辺を皆で歩きました。地面が沈んでしまっていたり、標識やフェンスが曲がっていたり、浜の近くでは、がれきが山のように積まれています。1年程が経った今でも津波の爪痕があちこちで見られました。

次の日の11時から、まつりを開催しました。内容としては、伊丹スープ(未来看護塾の顧問の先生特製スープを田の浦で採れたワカメを使って作りました)、足湯・手湯、健康教室です。伊丹スープは田の浦の方々に好評で、たくさんの方が食べに来て下さいました。また私たちが練習したマルモリダンスを田の浦の方々の前で披露しました。一緒に踊ってくださったり、笑ってくださいたり、皆さん楽しくされていました。今年度も是非、田の浦での支援活動を継続してまいります。



プロジェクト紹介

未来看護塾では、地域の人々と共により良く生きていくことをめざし、医療現場や地域で働く看護職、ボランティアの人たちとの交流を通して、「未来の看護のあり方」を考えていきます。

活動の内容としては、彦根市立病院の小児科病棟で子どもたちと遊んだり、緩和ケア病棟でティーサービスや、花の水やりなどのお手伝いをしたりしています。

NPO 法人ほほハウスでは、障がいのある子どもたちと料理を作ったり、一緒に外出するなどのイベントに参加しています。また彦根市立城南小学校の学童保育にも週1回参加しています。今後は、地域での健康教室や今回訪問した田の浦の支援活動も継続して行っていきます。

ちよこしと聞いてよー！プロジェクト白書

2011年8月20日に第1回「未来看護塾交流会」が開かれました。参加者は1期生5期生までの12名の先輩方と6期生7名、7期生8名、8期生4名、9期生3名が参加しました。それぞれのグループでお菓子を食べながら喋ったり、伊丹先生のス

ープを頂いたりしてから、1期生から9期生までの1人1人がみんなの前で挨拶をしました。また、未来看護塾がテレビで紹介された時の映像をみんなで鑑賞後、お話を聞いてみたい先輩の元に行って(養護教諭のグループが多かったです。大学生時代の勉強のことや仕事のことなどのお話を聞いたり、

先輩に質問をしたりして、交流しました。また途中からスペイン語ゲストでいつもお世話になっているほほハウスの福井さんに来て頂きました。ほほハウスと未来看護塾は1期生からの交流です。

多くの先輩方に来て頂き、たくさん交流できて、とても充実した良い時間が過ごせました。

これから毎年このような形で交流していけたら、と考えています。今年度も開催予定をしています。これからも人間看護学部のことながりを大切にしていきたいです。

地域の声

2012年3月10日に彦根市立病院で健康講座というイベントが行われました。そのイベントに参加されるお母さん方が小さなお子さんを預けておけるように子どもたちの遊び場を提供する「ちびっこ広場」という形でこのイベントをお手伝いさせてもらいました。赤ちゃんから幼稚園くらいの年の子どもたちが遊びにやってくる自分の好きなコーナーで遊んでいました。

お母さんがたに健康講座をされていた小児科の先生がこういった託児所のような場所は他の講演をするときにもあるけれど子どもたちが部屋から出ていってしまうことが多い。今回はそのような子がほとんどいなくてお母さん方も健康講座に集中できたと思う。それだけ子どもたちがたのしく過ごしていたということ。というような話をしてくれました。

これからも地域の方に喜んでいただけるように、地域の方々の声に耳を傾け、活動にフィードバックさせていただきます。

1年間の活動を通して 成果と課題

今年度も様々なイベントを通じて、様々な年代の方々と交流できました。今年には計画書になかった、新たなイベントに多く参加していくことが出来ました。特に田の浦でのイベントは、私たちがイベント作りに関わっていくという貴重な経験ができました。課題として一年を通して、参加メンバーが固定されてしまっていたことです。未来看護塾に参加している人は多いのですが、継続して活動に参加している人は限られていました。

また、イベント後の話し合いの場をきちんと設けて次の活動にフィードバックさせていく必要があると思います。



Harmony新聞

2012年(平成24年)
3月31日

クリスマスコンサートに 彦根のゆるキャラ登場!

クリスマスコンサートは毎年行っているHarmonyの一大イベントです。吹奏楽部やダンスサークルの皆さんの演奏とショー、そしてバルーンを使った出し物なども行われ、毎年多くの地域の方が訪れてくださいます。

このクリスマスコンサートは、障がい児・者とその家族の方にも気軽に参加していただき、楽しんでいただくことを目的としています。

そのため毎年より楽しい催し物ができるように、メンバーで案を出し合っています。

そして昨年はより楽しく、地域に根付いたコンサートにしようという計画をし、彦根のゆるキャラたちをゲストに迎えることができました。来てくれたのは、



来てくれた「いしだみつにゃん」

クリスマスコンサートは毎年いしだみつにゃん、しまきこちゃん、おたににゃんぶの三人です。吹奏楽部やダンスサークルの皆さんの演奏とショーを楽しんでくれました。

例年よりたくさんの方にコンサートへの宣伝をして下さった地域の方が訪れてくださいます。今年度は小さい子どもも参加が多く、来客数は約二百人と、過去最大になりました。

多くの方の笑顔を見ることができ、大成功のコンサートとなりました。

地域の声

ハーモニーの活動は、障がい者と同世代の仲間であるとともに、社会参加を積極的に促す支援者としての役割を担っています。障がい者やその家族が社会の中で当たり前に生活したいという願いを実現

してきているという、大変大きな成果をあげています。定例活動は子どもたちの生活の中に位置づいた楽しい活動になっており、コンサートは広く地域に暮らす多くの障がい者が毎年楽しみにしている行事として定着してきています。

近年においては、ハーモニー

を核として他の学生サークルや一般ボランティアとの連携の輪が広がってきており、活動の広がりとともに障がい者理解の深まりを感じるところです。また、障がい者の家族にとっては、ハーモニーの支援によって家族だけではできない活動ができることが大きな励みと希望になっています。

Harmonyの活動とは?

Harmonyは障がいのある子どもと共に活動を行っています。私たちはこの活動を通して、人と共に何かをしたり、コミュニケーションを取りながら成長の手助けができればよいと思っています。また、子どもたちの接し方を学んだり、活動を円滑に行うために自主的に行動していく中で、学生自身も成長していければよいと考えています。

具体的活動は、大きく分けて二つあります。一つは、主に毎月行う定例活動、もう一つは定例



定例活動「茶道」の様子

活動以外の体験活動です。

定例活動は、散歩、茶道、創作活動(粘土、お絵かき)という毎回同じ内容の活動をし、学生と子どもとの距離を縮め、子どもが自立するために必要な力の基礎を作ることを目指しています。

その他の体験活動は、お茶摘み、カヌー体験、宿泊体験、料理体験などで、幅広く様々な体験を行っています。そしてこの体験が子どもたちの新たな興味を引き出すきっかけになればよいと考えています。学生にとっても普段の活動では見ることができない子どもたちの様子を見ることができ、よい機会となっています。

このように、子どもたちと共に楽しみながら活動を続けていくことがHarmonyのモットーで、活動を通して子どもも学生も成長できればよいと考えています。

成果と課題

成果

運営に関しては、昨年度に引き継ぎの面で課題あったので、今年度は引き継ぎをスムーズに行うために一回生の夏の時点で次期代表、副代表、会計を決めました。このことにより偏っていた仕事量の分担がある程度なされたと考えています。

活動に関しては、例年より多く体験活動を取り入れることができたため、子どもたちに様々な社会経験をしてもらうことができました。またそのような活動では、記事にもしたようにゆるキャラを呼べたことや、近江楽座で活動されている一姓さんとの共同企画が実現したこと、そしてギョウザ作り体験で彦根市内の施設を借りることができたことから、より地域に根付いた活動ができたのではないかと考えています。

一年間の活動を通じて、以前ならすぐに立ち歩いていたり子どもが、落ち着いて作業できるようになったという変化が見られる

ようになりました。このように子どもたちにより変化があったということも大きな成果だと考えています。

課題

運営に関して、仕事量の偏りは解消されたものの、その分必要となってきたメンバーでの情報の共有が上手くなされていないと感じる場面がありました。そのため、定例活動で混乱が生じることもありました。このような状況を生まないために今後情報共有の手段としてインターネット上のネットワークを効率的に使う必要があると感じました。

一姓さんのコラボ企画 いも掘り・焼きいも会

去年の十月二十三日に近江楽座の一姓さんと共同でいも掘り・焼きいも会を行いました。大きい子の組は落ち葉拾い、小さい子の組はいも掘りとそれぞれ役割の分担をして作業を行いました。ほとんどの子どもが集中して作業をしていました。小さい子どもがいもを掘りあてた時には満面の笑顔を見せてくれました。

その後にいもを洗って焼きいもにするための準備を行いました。ここでも皆それぞれ頑張っている様子を見ていました。

そして小さい子どもが散歩に行っている間に一姓さんが焼きいもを作ってくれたので、最後にその焼きいもを試食しました。子どもたちはそれを食べて満足そうな様子でした。

子ども、学生にとっても



楽しい体験になったので、一姓さんにはとても感謝しています。

COCOCU 新聞

BIG NEWS!!

COCOCU vol.3 発行!!



連載の「徒歩タビ」第3弾では高島市マキノ町を訪れました。この連載では、歩いてまちを散策し、観光ガイドには決して載っていない、滋賀の暮らし、風景、歩いて出会った面白い発見を伝えます。



特集では台所にお邪魔して、お気に入りの器や、いつも常備している食材などを取材。暮らしの様子が見えてくる、リアルな台所を覗きました。

なんと vol.2 発行から、1年もしないうちに待望の vol.3 が発行となりました。

vol.3 のテーマは「おうみをたべる」。滋賀ならではの食と、それにまつわる暮らしのシーンを集めました。

特集内容は、「滋賀の“ほんとう”の台所」。滋賀に暮らす3軒のお宅にお邪魔して、台所にまつわるお話をお聞きしました。

小特集はふたつ組んでおり、ひとつは「滋賀の赤かぶ」。もうひとつは「食べ歩き日和」と題し、大津の商店街を食べ歩き、かわいらしいイラストで商店街の美味しい魅力を伝えています。

vol.1、vol.2 でおなじみのここちえやおうみのふみくら、コラムも連載中です。

プロジェクト紹介

「cococu おうみの暮らしかたろぐ」という、滋賀の魅力を伝える地域雑誌の発行をしています。食、文化、風景、歴史に恵まれた、当たり前のように、実は豊かな日常。観光雑誌には決して載っていない「滋賀ならではの暮らし」を伝えていきます。

これまでの活動

2010年 cococu vol.1 発行

特集「おうみの暮らしかた」

情報誌には載っていない滋賀の“ほんとう”を求めて、日常の暮らしを楽しむ方々の住まいにお邪魔しました。

2011年 cococu vol.2 発行

特集「おうみのしごと」

仕事、なりわい、職、商い、働くということ。伝わる技や文化、そこに懸ける想いを知るために、滋賀の中にある“しごと”を見つめます。



地域の声

暮らしや文化を記事にして、一つの魅力として光を当てることには大きな意義があると思います。滋賀には色々な資源があります。それをきちんと記録して残していく、発信していくという活動に、これからも期待しています。(蒲生公民館館長 / ガリ版伝承館取材協力 門谷さん)

どの記事もとても読み応えがありました。その土地に暮らしている人たちの息吹が誌面から感じられました。/ 写真の使い方、対象の切り取り方がうまい。1ページづつ、丁寧に読んでいかなければならない、という気にさせられる演出が心地よかったです。(cococu 読者の方々)

COCOCU 自慢!

「近江をたべる」がテーマの cococu vol.3 が発売したばかりですが、「近江のくらし」vol.1 と「近江のしごと」vol.2 も、絶賛発売中です!

取り扱い店舗は増えるばかり! 最近では金沢や倉敷など、関西圏を超えて離れた地域からも発注があり、この1年で cococu は着実に広まっていきます。

そしてリトルプレスといえ! 京都の恵文社といっても過言ではないくらいの書店ですが、そちらでも cococu は販売されております! しかも第一部隊はすでに完売!

また、個人で購入したいと、問い合わせくださる方も! こうやってじわじわ広まってゆくのも、cococuらしくて素敵です。多くの人に cococu を手に取っていただけてみたいので、本当にありがたいですね。

取扱店

ml | SyuRo | Lykkelig | KEIBUNSHA BOOKS, GIFTS AND GALLERY

カッパル余呉 | 半月舎 | 叶匠寿庵 | Ogama

shiroiro-ie | mitsunaga | 蟲文庫 | uta no tane

Jl Bussetto

...その他、続々と増えてます!



一年の活動を通して...

cococu は基本的に、年に一度の発行ということで、今年で三周年になります。

vol.3 まで出たところで、なんだかシリーズ感が生まれましたよね。まだまだ創刊したてのほやほや雑誌ですが、年々完成度が高くなっているように感じます! cococu はすごい勢いで成長中です。

vol.3 における成果は、これまでの vol.1、2 で積み上げてきたものを、より強いものにした点にあると思います。コラムや連載もそう

ですし、cococu の大きなテーマや趣旨がはっきりしてきたことが大きな成果であると感じています。

もちろん個人の編集、制作のスキルも上がったことも成果だと思います。cococu は毎年、編集部員が全員入れ替わる仕組みなので、引き継ぎやテーマの一貫性をどう保っていくかが今後の課題だと感じました。



いしアート：川村浩一（代表&発表者）（滋賀県立大学大学院）、大林みさよ、鈴木麻里、高橋真希、中上ちえ、吉田 綾（滋賀県立大学）柴田伸典、深尾幸秀、村山圭祐、山田美津記、山本愛子（滋賀大学）、大亭扇鳩、大亭紅蓮、嫁乃サンバ、きぬ乃家鼓伴、江戸川源成、京龍亭豆京、江戸川旦朝、深草亭妻々（龍谷大学落語研究会）/ 担当教員：佐々木一泰、森川 稔 / 協力：知的障がい者授産施設 瑞穂、大津の京阪電車を愛する会、京阪電気鉄道株式会社（石坂線みんなで文化祭）、麻田有代（筆遊びのWS 講師）、桂優々（落語家）友光仁美、辻村耕司、吉野真代（写真）、辻村敬之、中堀 努（映像・編集）久保愛美、貞山真里奈、筒井明日実、岸田奈津實、水谷麻里奈（巡回展担当）/ 協賛：石山商店街振興組合、滋賀県立大学 近江楽座、平成22年度滋賀県にぎわいのまちづくり総合支援事業

石山落語



01 石山落語第一席@花咲館下駐車場（2011.07.23）/ 02 石山落語第二席@京都銀行駐車場（2011.07.30）/ 03 石山落語第三席@空き店舗マルビー（2011.08.06）/ 04 石山落語第四席@東レグラウンド（2011.09.25）/ 05 石山落語第五席@空き店舗マルビー（2011.11.12）

- 01 『石山落語第一席』
日時：2011年07月23日
場所：花咲館下駐車場
出演者：嫁乃サンバ、きぬ乃家鼓伴、大亭紅蓮、江戸川源成（龍谷大学落語研究会）
演目：大亭紅蓮「平林」、きぬ乃家鼓伴「どうぶつえん」
記録：友光仁美（写真）、中堀努（映像）
- 02 『石山落語第二席』
日時：2011年07月30日
場所：京都銀行駐車場
出演者：大亭扇鳩、京龍亭豆京、深草亭妻々（龍谷大学落語研究会）
演目：京龍亭豆京「つる」、大亭扇鳩「始末の極意」
記録：辻村耕司（写真）、辻村敬之（映像）
- 03 『石山落語第三席』
日時：2011年08月06日
場所：空き店舗マルビー
出演者：大亭扇鳩、京龍亭豆京、深草亭妻々（龍谷大学落語研究会）
演目：大亭扇鳩「つる」、大亭扇鳩「始末の極意」
記録：辻村耕司（写真）、辻村敬之（映像）
- 04 『石山落語第四席』
日時：2011年09月25日
場所：東レグラウンド
出演者：大亭紅蓮、深草亭妻々、江戸川旦朝（龍谷大学落語研究会）
演目：大亭紅蓮「厄払い」
講師：麻田有代（数寄和大津）
記録：吉野真代（写真）、中堀努（映像）
- 05 『石山落語第五席』
日時：2011年11月12日
場所：空き店舗マルビー
出演者：桂優々（落語家）、大亭扇鳩、きぬ乃家鼓伴、大亭紅蓮（龍谷大学落語研究会）
演目：桂優々「四人癖」「鷲とり」、大亭紅蓮「平林」、きぬ乃家鼓伴「青菜」、大亭扇鳩「米揚京」
記録：辻村耕司（写真）、辻村敬之（映像）

BIG NEWS 第二回アーバンデザイン甲子園にて 審査員特別賞受賞！

今年も開催された日本建築学会近畿支部主催の第二回アーバンデザイン甲子園にて、みごと石山アートプロジェクトが審査員特別賞を受賞しました。石山アートプロジェクトの受賞は、これで二年連続の受賞となり、プロジェクトの更なる向上を目指すチームに活力を与えています。

Introduction 石山アートプロジェクトって？

石山アートプロジェクトは、石山でしかつけれないアートを制作し、ハンディキャップを持つ人・アーティスト・地域の人・商店街の人・学生、それぞれをつなぐプロジェクトです。今年度は、誰にでも伝えることのできる物語や言葉テーマに「落語」を展開しています。

Voice 足が悪いからこんな近くで楽しいことやってくれたら嬉しいよ

かつては映画館が二件もあった石山商店街も今はその面影は無くなり、街中に娯楽という要素が消えつつある。地域に住む人の中には体の調子が悪く遠くに出かけられない人もいます。そんな方々に喜んでもらえ、頂いたこの言葉はこちら側まで嬉しい気持ちにさせてくれます。

プロジェクト自慢 こんなにたくさん笑顔が観れたよ

地域のイベントと連携して落語イベントを計五回行いました。毎回たくさんの方に来場してもらえ、会場はいつもアットホームな雰囲気になっていく心地よい空間が広がっていました。イベントを通してたくさんの方の笑顔が観れました。笑顔の数ではどこにも負けません！

成果と課題 三年目の活動

今年度の取り組みはプロジェクト3年目ということもあり、これまで行ってきた活動とは違ったアプローチを試みる機会となった。これまでのモノとしてのアートだけでなく、コトバとしてのアートという切り口で商店街で落語を行った。老若男女年代問わず多くの参加があったことは、プロジェクトの幅を拡げるための新たな試みの支えとなり、次のアイデアを試す活力となった。また、こうした新たな試みを取り組むことで更なるネットワークの構築につながっている（下の図参照）。今年度は、龍谷大学落語研究会やプロの落語家桂優々氏との関係も生まれた。商店街に欠けている娯楽という要素を今後補え、石山商店街が目指す「暮らしの広場」としての商店街に成長していくために一石投じられたのではないかと思っている。あとは、ここで生まれたネットワークを機能させる仕組みを整備していくことが今後の課題である。新たなネットワークを生み出したことは別に、新たな街の使い方を落語を通して提示できたこともひとつの成果である。これまでは、単なる商店街を虫食い状態にしていた駐車場や空き店舗を街中のイベントスペースとして捉え、活用し、街の資源として示せたことは地域に貢献できるプロジェクトへ少し成長できた結果だと考えている。

今後の提案としては、3年間の石山アートプロジェクトで生まれたネットワークやWSの手法、コンテンツを現在石山商店街が行っている「街の駅」の社会実験に還元していきたい。また、今後も様々な団体を石山アートプロジェクトが媒体となって石山商店街に引き込む必要がある。現在、商店街では石山アートプロジェクトがつないだ滋賀大学の学生やそのと連携した事業に取り組んでいる。直接的には商店街と協働した事業をせずとも、こうして自らが様々なアーティストや団体を引き込む呼び水となることは、間接的にはあるが地域に大きく貢献することにつながるかと考えている。